

日本財団パラリンピック研究会 紀要

Vol.1 2015年1月

目 次

発刊の言葉.....	小 倉 和 夫	3
------------	---------	---

研究論文

1964東京パラリンピックが残したもの.....	小 倉 和 夫	5
--------------------------	---------	---

国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心.....	佐 藤 宏 美	45
--------------------------------	---------	----

パラリンピックにおける日本および各国の選手数と成績の変化…	番 定 賢 治	73
-------------------------------	---------	----

付 録

Overview of the Summer Paralympic Games		86
---	--	----

Overview of the Winter Paralympic Games		88
---	--	----

平成26年度日本パラリンピック委員会加盟競技団体 ホームページ掲載情報一覧 …		90
---	--	----

パラリンピックに関する日本語文献リスト（図書）		98
-------------------------------	--	----

Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group

Vol.1, January, 2015

Contents

To Commemorate the Publication of the Journal	··· Kazuo Ogoura	3
---	------------------	---

Articles

The “Legacy” of the 1964 Tokyo Paralympics	····· Kazuo Ogoura	5
--	--------------------	---

The General Public’s Awareness and Interest in the Paralympics in Japan and in Some Selected Countries	····· Hiromi Sato	45
---	-------------------	----

Analysis of the Number, Gender, and Performance of Athletes in the Paralympic Games	····· Kenji Banjo	73
--	-------------------	----

Appendix

Overview of the Summer Paralympic Games	·····	86
---	-------	----

Overview of the Winter Paralympic Games	·····	88
---	-------	----

Contents of the Website of the JPC Member Organizations in 2014 (Japanese language only)	·····	90
---	-------	----

List of Japanese Literature on Paralympics (Japanese language only)	·····	98
--	-------	----

発刊の言葉

日本財団パラリンピック研究会代表
青山学院大学特別招聘教授 小倉 和夫

日本財団パラリンピック研究会は、パラリンピックの歴史や理念、その社会的、経済的、政治的意義についての評価、そして2020東京オリンピック・パラリンピックへ向けての課題などについて調査研究を行うため、昨年半ばに発足したものです。この度、その調査研究結果を出来るだけ広く関係者と共有するため、数カ月毎に「紀要」を発行することにいたしました。

我が国においては、オリンピック研究の一部として、あるいは、障害者スポーツ研究の一環として、パラリンピックについて調査研究がなされてきてはおりますが、パラリンピック自体を中心に据えた研究体制は十分とはいえず、関心のある方々と、情報や研究成果を共有し、我が国、ひいては世界におけるパラリンピック研究の推進のため役に立てればと願っております。

皆様のご支援、ご協力、ご教導をいただければ幸甚であります。

.....

To Commemorate the Publication of the Journal

Kazuo Ogoura
Director of the Nippon Foundation Paralympic Research Group
Guest Professor of the Aoyama Gakuin University

Last year the Paralympic Research Group (PRG) was initiated in the Nippon Foundation, in order to investigate and study the history and ideals of the Paralympics, its socio-economic and political significance as well as tasks ahead in preparation for the Tokyo 2020 Paralympics. The Group has decided to publish, seasonally in principle, a journal which announces major results of the Group's studies in order to share them with interested fellow researchers or students. In view of the situation in Japan where the studies specifically focussed on the Paralympics are apparently yet to be better deepened and widened, we hope that we will be able to gather forces with other researchers to contribute to the development of studies on the Paralympics in Japan and also in the world at large.

1964東京パラリンピックが残したもの

小倉和夫

オリンピックの遺産といえば、通常、建設された競技場、選手村、さらには交通網の整備や観光施設の充実などがあげられるが、これらについての研究は、概して、オリンピックに多額の資金を投入することを合理化する観点（主として経済的観点）から考察、分析されることが多く、スポーツ政策や外交政策、社会政策などの観点からの考察が十分おこなわれているとは言い難い。

この点は、とりわけパラリンピックの考察にあたっては、十分留意しなければならない点である。なぜならば、パラリンピックの「効果」は、経済的なものよりも、社会的、政治的なものが多いと考えられるからである。

さらに、パラリンピック東京大会の「遺産」については、日本社会への影響、効果といった点のみならず、（パラリンピックという名前が初めて広く使用されたことに表れているように）この大会が、パラリンピックの歴史の上でも重要な大会であり、国際的パラリンピック運動に与えた影響も小さくないことから、国際的次元でも「東京大会の残したもの」、あるいは、そのインパクトを考えなければならない。

以上の観点をふまえ、パラリンピック東京大会の「残したもの」を、（相互に若干重複はするが）大略、以下の項目を念頭におきつつ考察することとしたい。

すなわち、

A. 国内面

- (1) 日本の選手へのインパクト及び日本の障害者へのインパクト
- (2) 障害者スポーツあるいは政策への影響
- (3) （スポーツに限らず）障害者対策への影響
- (4) 社会一般へのインパクト——たとえば、国際意識、寄付文化、ボランティア精神など
- (5) 技術開発への刺激
- (6) その他——たとえば、皇室の関与

B. 国際面（パラリンピック運動へのインパクト）

- (1) 参加する障害者の範囲
- (2) 健常者との融合
- (3) アジアへの広がり
- (4) アイデンティティの確立（名称の問題やパラリンピック精神の確認など）である。

A. パラリンピック東京大会が、日本のスポーツ界、障害者、社会一般に与えた影響ないしインパクト

1. 出場選手への衝撃ないし影響

東京パラリンピックに出場した日本人選手は、何よりも、大会に出場したこと自体に人間としての喜びを感じ、自らへの自信を深めた。フェンシングに出場した青野繁夫氏は、つぎのように回想している：

「フェンシングに於て、私達の技は確かに練習期間も八ヶ月という短時日で、西欧の伝統に対抗しようとするのであるから、考えれば無茶という人もあったと思うが、私達は敢然とそれに斗い、とにかくやり抜き、銀メダルを獲得出来たことは、——（中略）—— やれば出来るという自信を強く味わってくれた。その自信は以後の私達の生活に、大きな示唆と勇気を与えてくれる（こととなった）」¹⁾

また、円盤投げに出場した小池正義氏は、記録はもの足りなかったと述懐しつつも、「こんな晴ればれとした気持ちを味わえ、たのしかった」と語っている²⁾。

第二に、日本の選手たちは、外国選手と自らを比較して、自立心の大切さを心に刻んだ。日本人選手53人のうち、5人の自営業者を除けば、のこりの者は、全て「自宅か療養所で面倒をみてもらっている者ばかりだった」が、「外国人のほとんどは仕事を持っており——（中略）—— 健常者と同じような生活をしている」のであった³⁾。そうした違いは、いやが上にも、日本人選手に自立心の重要性をあらためて強く感じさせるものであった。

こうした障害者にとっての自立心の大切さは、外国選手団の第一陣として訪日したアルゼンチンの選手団が、日本側の用意したリフト車に乗って航空機から降りることを拒み、自ら「松葉ツエをついたり、自衛隊員の肩につかまるなどして、歯をくいしばりながら、タラップを降り、待ちうけた車イスへ」向って行く姿にも、強く表れていた⁴⁾。

こうした自立心は、実は、外国選手たちが、常日頃から体力、運動能力を高める努力を行っていることにも表れていた。特に、日常生活において体力の維持強化をはかることの重要性を日本選手にあらためて認識させたのは、大会期間中の日本選手の負傷の多さであった。「競技中に傷を受けるほどの事故は、日本選手は二人がアキレス腱を切り、十四名の負傷者が出」たのだった⁵⁾。

日常生活への反省は、体力作りのみならず、使用する器具の問題にも波及した。日本選手は、自らの用いている車イスの性能が、外国選手の用いているものと比べ、相当違いがあることを、ひしひし感じたほか⁶⁾、車イスの操作においても未熟な面があることを感じ、改善への意欲を燃やした。たとえば、車イススラロームに出場した松永千之、菊地忠正両選手は、次のように述べている：

「外国選手はからだが大い割に車イスの扱い方がすごくうまい。われわれはむしろ車に使われているという感じでした。でももっと練習すれば車イスを使いこなせる自信がわきました」⁷⁾

最後に、特に注目すべき結果として、日本人出場選手への集団就職の斡旋がある。アメリカ選手団の一員であったリチャード・マドウロ氏は、東京大会で、五種競技やバスケット競技に参加したが、氏は、日本のバスケットチームが、米国チームとの対戦などで大差をつけられながら、最後まで粘り強く試合をすてなかった根性に感銘し、友人のアメリカ人で、日本において食品保存器製造会社「日本タッパーウエア会社」を経営し、また障害者の雇用に以前から理解のあったジャスティン・ダート氏に、こういう根性のある日本人を雇うべきと進言し、選手の出身の別府のリハビリセンターの所長中村裕氏とダート氏との話し合いの結果、別府のみならず、全国の障害者の応募をつのり、7人が日本タッパーウエア会社に集団就職する結果となった⁸⁾。

2. 障害者スポーツ活動への影響あるいはインパクト

日本の障害者スポーツ活動に対するパラリンピックのインパクトは、パラリンピックを、可能ならば開催しようという意欲、あるいは、それへの準備過程において既に現れた。その典型的事例は、1961年8月、身障者関係24団体を中心に、初めて「身体障害者スポーツ振興会」が結成され、同10月には、身体障害者体育大会が開催されたことであろう。

こうした動きは、従来運動会的性格の身障者スポーツを、競技性を表に出した体育大会的なものへと変化せしめる契機の一つとなったと言われる⁹⁾。

そして、パラリンピック大会の翌年、1965年には、523名の選手の参加を得て、身体不自由者、聴覚障害者、視覚障害者による、第1回全国身体障害者スポーツ大会が、陸上競技、水泳、卓球などの種目について開催されたのであった¹⁰⁾。

このような、「リハビリやレクリエーションから本格的なスポーツ活動へ」という動きの一環として、従来身障者のリハビリを中心に活動してきた中村裕博士の病院を基盤として、東京大会の一年後、パラリンピック発祥の地ともされる、英国ストークマンデヴィルの施設を参考にした「太陽の家」が、大分県別府に建設された。その数年後には機能強化センターも拡充され、そこで機能強化訓練を受けた人々のなかから、1969年7月、ロンドンで開催された国際身障者スポーツ大会に出場した日本選手5名の内2名が育ったのである¹¹⁾。

他方、パラリンピックが、観客の意識に与えたインパクトも大きかった。パラリンピックは、日本の観客に、ほとんど初めて、障害者スポーツのすばらしさを認識せしめた。とりわけ、次ぎのようなエピソードは、観客に障害者スポーツの力と感動の源を認識せしめる契機となった。

「ある外国の女性選手。ご主人に抱きかかえられてプールにはいった。スタート。みるみる遅れた。先頭の選手がゴールインしたとき、彼女はまだ五メートルぐらいしか進んでいなかった。ブクブクと沈みかけてはまた懸命に浮ぶ。二メートルぐらい後ろから救助員が、万一に備えてついて泳ぐ。彼女の顔が何度目かブクブク沈みかけたとき、救助員が助けようとした。が、プールサイドのご主人は手を振って押しとどめた。あと二メートル、一メートル。それがなかなか進まない。スタンドの観衆は拍手のしつづけ。二十五メートルを泳ぐのに、三分以上かかったが、とうとう泳ぎきった」¹²⁾

こうして、有識者やスポーツ関係者の間に、「身障者スポーツを本来のスポーツと考える必要がある」との意見が表明されるようになったのである¹³⁾。

3. 障害者を取りまく一般的状況、社会意識、障害者関連政策へのインパクト

パラリンピック東京大会には、なによりも、多くの人々にとって、身障者のイメージを転換するきっかけの一つとなった。その背景は、外国の選手たちの明るく、朗らかな様子にあった。

「いちばん印象に残ったのは——（中略）——、外国選手たちの底抜けの明るさだった」。そう報じた新聞記事は、「明るい外国選手」という見出しをつけていた¹⁴⁾。

現に、パラリンピックの現場の運営に携わった町田英一氏（大会当時、選手村運営協議会障害連絡部長）は、次のように語っており、日本人にとって、障害者のイメージが、一変した様子がうかがえる：

「徐行している村内循環バスの後ろにつかまって車椅子のまま走っている選手にもびっくりさせられたが、インターナショナルクラブでの楽しそうなダンスパーティー、夜タクシーをつかまえ、車椅子をつみ込ませて渋谷の盛り場に繰り出してゆくグループを見ているとむしろほう然とさせられたものだった」¹⁵⁾

こうした意識の変貌は、大会運営の責任者であった葛西嘉資氏とのインタビューで、質問者のジャーナリストが、「身体障害者のスポーツ大会という、見ていて痛々しい気がしませんか」とたずねた際に、葛西氏が、「日本人の身障者に対する考え方は、西洋よりも十年は遅れとるんじゃないでしょうか」と応じていることに象徴的に現れている¹⁶⁾。

ここで、葛西が「日本の障がい者に対する考え方は、西洋よりも十年は遅れとる」という時の、「日本の考え方」の基本について、当時葛西氏と同じ厚生省出身でパラリンピックの組織、運営に携わった井手精一郎氏は、当時を回顧して「昔から、日本は、障がい者を隠しました」と言い、そうした状態から、「障害者を顕在化させる」方向への転換こそが、日本の障害者対策の新しい動きであったと述べている¹⁷⁾。

加えて、パラリンピックは、身障者の能力を再評価するきっかけともなった。この点について、中村裕氏は、昭和39年の時点でパラリンピックに関連した論文のなかで、「一般に社会は、身障者の能力を実際以下に低く評価する傾向にあるが、第三者に彼らの能力を再認識させるよい機会を与えることにもなり、その意義は大きい」と述べている¹⁸⁾。

また、パラリンピックは、身障者自身のみならず、社会一般に、身障者の自立が大切であるとの認識が深まる一因ともなった。身障者が、大会に出場することによって、「今後の自立生活に自信を得た」という点が、広く伝えられ、「日本の身障者対策一歩前へ」という掛け声まで報道された¹⁹⁾。

一般社会のみならず、労働界や医学界へのインパクトも無視出来ないものがあった。例えば、労働問題との関連では、労働評論家の渡辺華子氏が、「パラリンピックにみる労働対策の断面」という論評を発表し、「スポーツあつての社会復帰で、スポーツと労働とが切り離せないことに注目すべきである」と論じ、同時に、パラリンピック大会のような「スポーツ大会に接することによって、身体障害者のみならず人間一般についてのわたくし自身の労働能力の理解や、労働の価値観が、ぐいぐいと変えられていくよう

な感じを持った」と述べている²⁰⁾。

医療との関係では、従来とかく、治療とは別個の問題と見られがちであったリハビリのプロセスが、治療と一体化されねばならないという意見を、医療関係者の間に強めるきっかけの一つが、パラリンピックによって与えられた。このことについて、ある医療関係者は、次のように述べている：

「近代の医療はシカを追う者山を見ずのたとえのとおり、疾病だけ考えてその母体たる人間は無視されてきた。——（中略）——セキ髄損傷の場合も同様である。その医療が障害に対する治療だけでなく、患者の回復を目的としていたなら、現在のセキ髄損傷患者はもっと回復度の高い状態にあり、パラリンピックはさらに楽しいものだったに相違ない」²¹⁾

このように、リハビリテーションを、予防、治療医学に次ぐ、いわば第三の医学として広く取り入れるべきとの主張は、パラリンピックを機会にさらに強まったのである²²⁾。

こうした一連の影響やインパクトは国際的にも評価され、東京パラリンピックにストークマンデヴィルから国際事務局員の一人として参加した、ある英国人は、その回想録のなかで、「（東京大会を観覧した）日本の政府関係者や観客は、身障者に対する古くからの偏見を克服するための、いわば先達（eye-opener）であった」と述べている²³⁾。

このような意識や認識の変化と平行して、幾つか、具体的な行動や措置が取られる（あるいは、その動きが開始される）こととなった。たとえば、公団住宅に身障者専用住宅をくわえるべきとの主張が、厚生省の高官によって言及された²⁴⁾。また、一般人からも、身障者の雇用促進の法制化を望む声もよせられるようになった²⁵⁾。さらに、一部の新聞の社説では、身障者対策について、行政省庁別にばらばらに行われている現状をあらため、行政の一本化をはかるべきとの意見が開陳されるようになった。

こうした動きが重なった結果、新しい幾つかの具体的方策が打ち出された。その一つは、相談員制度の創設であった。この制度について、井手氏は、次のように解説している。

「身体障害者の中で、相談員制度を設けて、その相談員さんが、困ったことがあれば、助ける、積極的に地域の身体障害者に声をかける、という制度なんです」²⁶⁾

このように、身体障害者の悩みや要望を、いわば「顕在化」し、積極的に表に出すことによって、身体障害者を保護すべき対象から、自立を支援すべき対象へと転換するというものであった。そして、1967年身体障害者福祉法がこうした考え方にそって改定さ

れ、同時に埼玉県所沢市に国立リハビリテーションセンターが設立されたのであった。

4. より広い社会的影響ないしインパクト

パラリンピック大会が、日本に与えた影響の一つに、日本社会の国際化への刺激と国際交流の促進があったといえる。

その一つの例は、日本の赤十字社が結成した語学奉仕団（通訳のためのボランティア）である。この奉仕団の結成が報道されると、アメリカ赤十字から反響があり、多くのアメリカ人が、交通費自弁で、横田、立川などのアメリカ軍基地から、日本赤十字の設置したボランティア訓練所に馳せ参じたほか、日本人訓練生をアメリカ人の自宅へ招待してくれるなど、はからずも、日米交流の促進に繋がった²⁷⁾。

また、アメリカ選手団のベンジャミン・リプトン団長から、同氏が校長をしている、時計修理技術学校に日本の身障者を数名招きたいとの申し出があり、「一新時計会社」の西村社長などと協議して具体案を検討することとなった²⁸⁾。

他方、パラリンピックは、いろいろな形での奉仕活動あるいはボランティア精神を日本社会へ根づかせる一つの契機ともなった。

上述の赤十字の語学奉仕団は、その後、日本国内で開催される各種の国際的スポーツ競技大会における通訳業務を、ボランティア精神で引き受けるベースとなったほか、選手村に設けられた医療チームでの語学奉仕団の経験から、各地の日赤病院において、外国人向けの案内、説明、通訳業務のボランティアが置かれる契機となった²⁹⁾。

日赤の活動以外のものとしては、たとえば、渋谷区婦人団体の有志は、パラリンピック会場の織田フィールドを、毎日朝7時から清掃する活動をおこなった。しかも、オリンピック会場の清掃が、奉仕活動とはいえ、東京都関係者などからの協力「依頼」に発したものであったのに対して、パラリンピック会場の清掃は、文字どおり「自発的」なものであった。その経緯は、次のように報じられている：

（オリンピック期間中の奉仕活動の反省会を婦人会の役員が開いた際）「パラリンピックの期間中にもやらなければ意味がない。身体の不自由な人たちにゴミのちらかっている競技場でスポーツをさせるのは地元のものの恥だ」という発言があり、今度は自主的に掃除のお手伝いをしようと決まった³⁰⁾。

こうした、組織的な奉仕活動のほかに、個人として、パラリンピック大会の成功のためにボランティア活動を展開し、社会的反響をよんだケースもあった。たとえば、パラリンピックが資金難で困っていることを聞き知った洋傘店の経営者荻島四郎氏は、たまたま全日本愛鳥協会の会長であったこともあって、パラリンピックの開会式のためのハトを調達するため、各地域のハトの飼育者に働きかけたという。この商店主は、自らの

活動について、つぎのように述懐している：

「いやあ、冷たいな、世間は。ハトがいたむといって出し惜しみやがる。だがな。たったひとり協力者があらわれたよ。ありがてえな。東京第一連合会（葛飾）というハトの会の会長している石鍋丈吉さんという人だよ。石鍋さんも身体障害者だった」³¹⁾

また、日本バーテンダー協会は、全国一万軒のバーやキャバレーに募金箱をおき、寄付金は、NHK 厚生文化事業団が管理することになり、事業団関係者は、毎日、数軒のバーなどを回り、募金を回収するという動きまであった³²⁾。

こうした、いわば個人的な寄付活動の他に、企業としての「ボランティア活動あるいは、社会貢献活動もあった。たとえば、選手村での販売店の設置については、オリンピック本体はスムーズに決まったが、パラリンピックには引き受け手がなかったところ、西武デパートが、「赤字覚悟の社会的責任」³³⁾として引き受けたといわれている。

こうしたボランティア的活動やイニシアチブは、寄付や大会開催時の奉仕活動にとどまらず、パラリンピックにおける身障者の活躍に感動した人々によって、社会的な啓発活動が開始されるという動きにまで発展した。たとえば、進行性筋萎縮症親の会は、障害者の雇用について雇用主を啓発する活動を開始したといわれる³⁴⁾。

5. 皇室の関与と戦傷者の関与

東京パラリンピック大会の大きな特徴の一つは、皇室の全面的な関与であった。別表(1)³⁵⁾でみるごとく、連日、いずれかの皇族が、かならず試合を見学されたほか、大会終了後も関係者を慰労されるなど、全面的な協力、激励を惜しまれなかったが、このことは、皇族の方々が、パラリンピックについて、深い知識と関心を、長く持たれる契機となった。そしてこうした皇室の関与は、物理的、制度的なものを超えて、心の関与であったことに注目する必要がある。そのことを、国際事務局関係者は、てるてるぼうずの逸話に託し、「皇太子ご夫妻が、国際事務局関係者を非公式に皇居に招待されたとき、美智子妃殿下から、小さい皇子が、てるてる坊主をつくり、大会時の晴天を祈ったことを教えていただいた」³⁶⁾という形で披露している。

こうした皇室の全面的関与とも間接的に関連していると考えられることに、第二次大戦の戦傷者の関与があった。事実、東京大会に出場した日本人選手53人のうち、何名かの選手は、神奈川県箱根療養所で療養していた旧軍人の脊髄損傷者であった³⁷⁾。

こうして、パラリンピック東京大会は、はからずも、第二次大戦の傷痕を、目立たない形ではあるが、日本社会全体として癒す、隠れた触媒ともなったのである。

更に戦傷者と関連して、見方によっては、パラリンピック大会は、平和の意味を深く考えさせる、一つの機会ともなったといえる。このことをいみじくも語っているのは、スウェーデンの選手であった。小児マヒによる脊髄損傷者であるエリク・ヨハンセン氏は、つぎのように語っている：

（スウェーデンは）しあわせなことに第二次大戦で中立を守ることができたでしょう。おかげでほかの国と違って戦傷者がいない。パラリンピックの仲間にもかなり犠牲者がいるようだが、戦争はいやだね³⁸⁾。

6. 技術と文化に関連する「遺産」と影響

パラリンピックの開催が、技術面で与えた影響は、何ととっても、当時未だ十分日本では発達していなかった、障害者用の器具、用具の開発、普及へのインパクトであった。とりわけ、車椅子の性能や、収尿器などについての、外国と日本との格差には目立つものがあつた。この点について、中村裕氏は、つぎのような感想をもらしていたという：

「車いすの違いもはっきりと判った。イギリスのスポーツ用車いすは、重さが十三キロである。日本の車いすは二十三キロだ。重さだけでなく、外人選手は体に合わせた車いすを使っていたが、日本は体格などに関係なく、サイズは全員が同じもので、一つしかなかった。これは遅れであり、一種の貧困としか言いようがない。

それと、日本にはまだ、脊損者には無くてはならない集尿器の満足なものがなく、殆んどは簡易収尿器を当てている状態であつたので、大会直前に中村はアメリカから急いで幾つかを輸入して、なんとか選手の分だけ間に合わせたのだったが、日本の選手は使い慣れていなかったのも、快適にプレーに専念できない者もいた³⁹⁾」

こうした器具、用具の開発への遅れが、反省を生み、その後の日本における発達への刺激となったことと平行して、そうした器具の使い方の「技術」の問題が存在すること、日本の身障者や関係者があらためて認識する契機となったが、このことは、上記の1. において、既に言及したところである。

文化面のインパクトについては、これを、外国への日本文化の紹介と、国内における芸術活動への影響の2つにわけて考えることが出来よう。

前者については、主として、パラリンピック開催中に開かれた、文化行事が、いわば、日本文化紹介の役割を果たしたことがあげられよう。こうした文化行事は、下記別表2の「パラリンピック劇場」プログラムが主体で、剣道、弓道、合気道などの古典的武術

のデモンストレーション、日本舞踊公演、映画の上映などが行われた⁴⁰⁾。

これらの行事の直接的インパクトは評価しがたいが、アルゼンチンの選手が、和服を着て写真をとっているところなどを見ても、外国選手団や関係者に、日本文化への関心を惹起したのと言えよう。

国内的なインパクトとしては、第一に、パラリンピックが、ある種の芸術の創作への触媒となったことがあげられる。すなわち、音楽の面では、「パラリンピック賛歌」(別表3)が作られ、また映画としては、大映が、「愛と感動の祭典」を製作した。

また、国内の障害者の文化活動を盛り上げようとの機運が、地域によっては強化される動きが感じられたとも報道されている⁴¹⁾。

7. 東京1964パラリンピックが、国際的パラリンピック運動に残した遺産あるいは影響

東京パラリンピック大会は、主催国日本において、障害者スポーツ、あるいは広く障害者対策をはじめ、多くの面で、いろいろなインパクトを与えたことは、これまで見た通りであるが、同時に、この大会は、国際的なパラリンピックのその後の方向づけにも、直接、間接に影響を与え、またパラリンピックの精神あるいは理念の確認や普及に一役買ったものと考えられる。こうした点は、国際的文献にはほとんど取り上げられていないが、東京パラリンピックの記録を詳細に検討すると、いくつか重要と思われる点が浮かびあがる。

一つは、パラリンピックに参加する障害者の範囲であり、第二に、健常者と障害者との融合であり、第三にパラリンピックの国際的アイデンティティの確立、特にその名称の確立、第四に、パラリンピックが、世界の人々の間に一体感を醸成する良き触媒となりうることについての再確認、そして第五に、パラリンピックのアジアへの広がりである。

(1) 障害者の範囲

従来、身体障害者の国際的スポーツ大会は、いわゆるパラリンピック、すなわち、ストックマンデヴィルの伝統に従い、脊髄損傷者のみのスポーツ大会であり、その歴史もこれあり、英国が主導的立場をしめていた(現に、パラリンピックの創成期には、英国が先頭で入場していた)。しかしながら、1960年代に入ると、身体障害者のスポーツ大会には、視覚障害者や手足切断者なども含めるべきとの運動が始まり(聾啞者については既に聾啞者の国際スポーツ大会が存在していたので、別個の扱いを受けてきた)、ドイツのブリンクマン氏などを中心に、国際身体障害者連盟が作られ、1963年7月には、オーストリアのリンツで、第1回国際身障者スポーツ大会が開かれるほどになってい

た。パラリンピック東京大会の準備段階で、その中心人物の一人であった中村裕氏は、ドイツの関係者からの要請もあり、64年の東京大会では、脊椎損傷者のみならず、視覚障害や四肢切断者もふくむ、身障者スポーツ大会の実現を目指し、ストックマンデヴィル関係者にも働きかけたが、結局合意が得られなかった⁴²⁾。

しかしながら、日本国内においても、パラリンピックを開くのならば、広く身障者一般に機会を与えるべきであるという声が高まり、結局、全体を二部構成とし、第一部は、脊椎障害者のみの正式なパラリンピック、第二部は、そのほかの障害者もふくめた身障者スポーツ国内大会として、東京大会が実施されたが、そうした経緯もこれあり、ドイツチームのみは、第二部にも特別参加した。

なぜドイツのみが、第二部に参加したかについては、次のような背景がある。そもそも、日本が脊椎損傷者以外の身障者の大会を開くことを決定すると、幾つかの国から、参加希望が出されたが、日本の組織委員会としては、国内大会の競技ルールも明確には定まっておらず、国際的な参加には消極的であった。しかしながら、諸外国の希望も無視できないとして、西ドイツ、フランス、オーストリアの3カ国を招待することとしたが、実際にはドイツのみが参加することになったのである⁴³⁾。

西ドイツが参加に熱意を持っていた一つの理由は、ドイツにおいては、1950年代の後半から、身障者スポーツ団体を統合する動きが盛んとなり、1957年ドイツ身障者スポーツ連合(DVS)が結成されるに至ったことも影響していると考えられる⁴⁴⁾。

いずれにしても、東京大会が、2部構成で、しかも第二部は国内大会という形をとったにせよ、パラリンピックに参加する障害者の範囲をひろげようとした公式的動きの走りであったことは間違いなく、その意味で、その後のパラリンピックの方向にインパクトを与えるものであった。

(2) 障害者と健常者との融合

今日でもオリンピックとパラリンピアンは、実際上とかく別々に扱われがちであるが(たとえば、2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックの日本選手の帰国記念パレードは、オリンピックだけで行われた)、英国の場合、東京五輪大会へ出場した選手は、オリンピック、パラリンピアン合同で、ロンドン市長主催のレセプションや首相への表敬を行った⁴⁵⁾。これは、東京大会の一つの隠れた「遺産」と言えよう。

(3) 名称の定着

東京大会を契機に、「パラリンピック」という名称が、日本の報道機関に定着し、東京大会の報道は、ほぼ例外なく「パラリンピック」として報道された。これは、英字紙にもあてはまり、たとえば、The Mainichi Daily News (1964年11月9日号)は、“Paralympics Open — 369 Wheel-Chair Athletes Taking Part”と伝えた。

(4) 閉会式

従来のパラリンピック大会は、ストークマンデヴィルの伝統に従い、流れ解散であり、閉会式は行っていなかったが、東京大会では、初めて正式に閉会式が行われ、その後の大会のモデルを作ることとなった⁴⁶⁾。

(5) パラリンピックの原点の精神の確認

東京大会は、スポーツの大会であり、その競技性は、当時の日本の水準から見れば、非常に高いものであったとはいえ、今日からみれば、身障者スポーツ大会の原点である「参加に意味のある」という理念、友情の醸成といった精神が、今日にくらべれば、顕著に発揮された大会であった。

いいかえれば、運動会的な「ほのぼのとした」空気があちこちに見られた。たとえば、つぎのようなエピソードもあった：

バスケットなど、日本チームはどの国と対戦してもたとえば60対6などというケタ違いの惨敗ぶり。日本がシュートに失敗すると、「ワンモア」と相手のアメリカチームがもう一度シュートさせてくれるありさまだった⁴⁷⁾。

また、次のようなシーンも報道されている：

車イス・スラロームでも日本選手にイタリアの選手が、旗門の上手な抜け方を教えていた⁴⁸⁾。

こうした「ほのぼのとした風景」は、パラリンピック特有のものといえ、そうした雰囲気は、当時のパラリンピックの精神の確認ないし再認識に役立ったものといえよう⁴⁹⁾。

なお、東京大会では、選手でなくとも日本の身障者が、選手村を訪問し、外国の選手と交流できるよう取り計らわれていた⁵⁰⁾が、こうしたやり方も、大会を広い意味での交流の場としようとするものであり、パラリンピックの原点の理想につながるものであったといえよう。

(6) アジアへの広がり

東京大会は、アジアから、はじめて、フィジー、セイロン、フィリピンが参加し、パラリンピック運動のアジアへの普及の一助となった。

そして、この動きは後年（1975年）、アジア太平洋の身体障害者スポーツ大会（フェスピック）へと繋がって行くのであったが、その過程について、フェスピック連盟会長であった、畑田和雄氏は、「フェスピックの31年を振り返って」という寄稿のなかで、

次のように述べている。

「1970年代の国際的な障害者スポーツ大会といえば国際ストークマンデビル大会，国際身体障害者スポーツ大会，国際ろうあ者スポーツ大会くらいでした。アジアや南太平洋地区の国や地域では障害を持つ人がスポーツに参加する機会は限られていました。中村博士はイギリスの国際ストークマンデビル大会まで行かずとも，アジア・南太平洋からも容易に参加でき，各国での障害者理解や福祉の向上につながる大会を実現しようと，香港のハリー・ファン博士，オーストラリアのジョン・グラント博士などに働きかけていました⁵¹⁾」

別表 1

11月8日（日）

名誉総裁皇太子殿下御夫妻 第1部国際大会開会式典御出席
午前10：10～11：00 選手村内織田グラウンド

三笠宮殿下御夫妻 第1部国際大会競技御観覧
午後2：00～3：00 選手村内織田グラウンド
槍正確投，車椅子スラローム，五種競技（フィールド競技）

午後3：05～3：45 選手村内洋弓場
アーチェリー
秩父宮妃殿下 第1部国際大会競技御観覧
午後2：30～3：00 選手村内織田グラウンド
槍正確投，車椅子スラローム，五種競技（フィールド競技）

11月9日（第2日）

名誉総裁皇太子殿下御夫妻 第1部国際大会御観覧
午後3：00～3：20 選手村内織田グラウンド
フィールド競技，槍投，砲丸投，円盤投，棍棒投
午後3：25～3：45 国立屋内総合競技場別館
バスケット
午後3：48～4：00 選手村内洋弓場
五種競技（洋弓）

11月10日（第3日）

常陸宮殿下御夫妻 第1部国際大会競技御観覧
午後7：00～7：20 国立屋内総合競技場本館
卓球
午後7：25～8：00 東京都体育館屋内水泳場
水泳

11月11日（第4日）

皇后陛下，皇太子殿下御夫妻 第1部国際大会競技御観覧
午後2：50～3：22 国立屋内総合競技場別館
バスケット（日本対英国）
午後3：28～3：40 選手村内洋弓場
アーチェリー
常陸宮殿下御夫妻 第1部国際大会競技御観覧
午後7：00～7：30 国立屋内総合競技場本館
重量挙
午後7：35～8：05 選手村内ショッピング・センター
フェンシング（エペ）

11月12日（第5日）

三笠宮殿下御夫妻，寛仁親王殿下 第1部国際大会競技御観覧
午前9：00～9：30 選手村内ショッピング・センター

フェンシング（サーベル）

午前9：35～10：30 国立屋内総合競技場別館

バスケットボール

名誉総裁皇太子殿下御夫妻 第1部国際大会閉会式典御出席

午後5：00～5：38 国立屋内総合競技場別館

11月13日（第6日）

名誉総裁皇太子殿下御夫妻 第2部国内大会開会式典御出席

午前9：00～9：40 選手村内織田グラウンド

第2部国内大会競技御観覧

午前11：00～11：30 選手村内織田グラウンド

100m競走，3段跳，走高跳，砲丸投，60m競走，100m障害競歩

11月14日（第7日）

常陸宮殿下御夫妻 第2部国内大会競技御観覧

午前9：00～9：30 選手村内洋弓場

洋弓

午前9：33～10：00 選手村内織田グラウンド

100m競走，走巾跳，棍棒投，砲丸投，立巾跳，車椅子スラローム

三笠宮殿下 第2部国内大会競技御観覧

午前10：30～11：30 選手村内織田グラウンド

1500m競走，5000m競走，砲丸投，走巾跳，立巾跳

名誉総裁皇太子殿下御夫妻 第2部国内閉会式典御出席

午後5：00～5：20 国立屋内総合競技場別館

別表2

パラリンピック劇場

11月9日（月曜）

映画 午後8時～9時30分

1. 今日の日本の農業
2. 日本の家庭生活
3. 日本の国立公園（九州篇）

11月10日（火曜）

古武道 午後8時～10時

1. 小笠原弓術礼射
2. 日本剣道之形
3. 神道夢想流杖道
4. 戸田派武甲流薙刀道之形
5. 直心影流剣道之形
6. 一心流鎖鎌術
7. 真蔭流柔術
8. 鹿島神流剣術柔術槍術
9. 天道流薙刀道之形
10. 一角流十手術
11. ステッキ術
12. 和道流空手道
13. 直心影流薙刀道之形
14. 神道夢想流杖道
15. 合気道
16. 長谷川英信流居合道

11月11日（水曜）

映画 午後8時～9時30分

1. 日本の産業
2. 2週間の日本旅行
3. 日本の国立公園（本州篇）

11月12日（木曜）

バラエティ・ショー 午後8時～10時

1. NHK テレビ演芸館 大神楽, コマ, 紙切り
2. 指笛音楽 田村大三と音楽奉仕団
3. 日本舞踊 花柳秀一門 東京母の会連合会
A. 越後獅子 B. 鳥の千歳 C. よさこい節 D. 五輪音頭 E. 紅葉の橋 F. ひえつき節
G. 荒城の月 H. この日のために

別表3

パラリンピック讃歌

門えりお 作詞

田中信昭 作曲

パラリンピック パラリンピック

高らかに たたえん――

世界の友輩ここに集いて

共に示さん 精神と技を

健やかなる心もて

来る日日にまことを尽す

我等の願い 集い溢れ

結ばれし友情は

大いなる力となりて

地球を包み

世界の平和を育てゆかん

注

- 1) 『パラリンピック東京大会報告書』(1965年, 以下『報告』) p.205.
- 2) 『大分合同新聞(以下『大分』)』1964年11月10日付。もっとも、種目によっては、選手としていわば「駆り出された」かたちとなった人々もいたようで、「日本で普及していない洋弓の選手などは、練習しないわけには行かず、『仕事の時間がとられて生活が苦しくなり、選手に選ばれたのはありがた迷惑でしたよ』とぼやく」(朝日新聞(夕刊)昭和39年11月12日付)ケースもあった。
- 3) 中村裕伝刊行委員会『中村裕伝』(1988年, 以下『中村』) p.100.
- 4) 『大分』1964年11月5日。
- 5) 『中村』p.100.
- 6) 『大分』1964年11月9日夕刊。
- 7) 『大分』1964年11月9日。
- 8) 『中村』pp.115-116.
- 9) 『報告』p.24.
- 10) 日本身体障害者スポーツ協会『創立20年史』(1985年, 以下『20年史』) p.75-.
- 11) 小林恒夫, 白川泰二『「太陽の家」の記録』(日本放送協会, 1969年), p.137.
- 12) 『朝日新聞』1964年11月12日夕刊。
- 13) 『新潟新報』1964年11月12日。
- 14) 『朝日新聞』1964年11月12日夕刊。
- 15) 『20年史』p.38.
- 16) 「荒垣秀雄連載対談, 時の素顔68」『週刊朝日』1964年10月23日号。
- 17) 「井手精一郎さんに聞く」『読売プレミアム』2014年11月8日。
- 18) 『中村』p.111.
- 19) 『新潟新報』1964年11月12日。
- 20) 『週間労働ニュース』1964年11月16日。
- 21) 川崎満治「月曜随想 心身障害者のリハビリテーション」『神奈川新聞』1964年12月7日。
- 22) 『中村』p.111.
- 23) Joan Scruton, *Stoke Mandeville: Road to the Paralympics*, Peterhouse, 1998, p.315.
- 24) 『新潟新報』1964年11月12日。
- 25) 「法で義務づけ望む, 身体障害者の雇用促進」『毎日新聞』1964年11月20日付投稿欄。
- 26) 前掲「井手精一郎さんに聞く」。
- 27) 障害保険福祉研究情報システム「国際身体障害者スポーツ競技会 パラリンピック大会 報告書」。
- 28) 『毎日新聞』1964年11月14日。
- 29) 1964年当時, 日本赤十字の職員であり, 当時青少年課長であった橋本祐子氏とともに, 語学奉仕団の企画などに携わった佐藤雅紀氏からのヒアリングによる。
- 30) 『朝日新聞』1964年11月13日。
- 31) 『読売新聞』1964年11月13日。
- 32) 『20年史』p.30.
- 33) 『20年史』p.38.
- 34) 『朝日新聞』1964年12月8日。
- 35) 『20年史』pp.63-64.
- 36) Scruton (1998), p.312.
- 37) 『中村』p.99, 2014年11月14日付毎日新聞記事「パラリンピックのはじまり4」によれば, 旧軍人の参加者は2名。

- 38) 『東京新聞』 1964年11月14日。
- 39) 『中村』 p.101.
- 40) 『報告』 p.72
- 41) 新潟における第七回県肢体障害者団体連合会主催の文化祭について、「ことしは特にパラリンピックが東京で開かれ、国民の身体不自由者に対する関心が高まったので文化祭りも盛りあがりをみせ」た、と報道された。『新潟新報』 1964年11月24日。
- 42) この経緯について、『中村』 pp.80-82.
- 43) Y. Kasai “Hosts to the Games in Tokyo” in *The 1964 International Stoke Mandeville Games for the Paralyzed in Tokyo*, Hunt Bernard, UK, 1964. また, Ian Britain, *From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games*, Common Ground, 2012, p.68は、ドイツの参加に関連して、ドイツの関連団体内部の軋轢に言及している。
- 44) Ulrike Adomat, *Die Vermarktung eines Sportlers mit Behinderung: Darstellung am Beispiel des mehrmaligen Paralympic - Teilnehmers Reinhold Bötzel*, Vdm Verlag Dr. Müller E. K., 2013, pp.46-47.
- 45) Scruton (1998), p.315.
- 46) 前掲「井手精一郎さんに聞く」。
- 47) 『朝日新聞』 1964年11月12日。
- 48) 『毎日新聞』 1964年11月15日。
- 49) この裏側として、当時ゲームや勝敗のルールが徹底あるいは普及あるいは確立しておらず、東京大会では、入賞順位の訂正や表彰式の延期や表彰の取り消し、採点の取り違いなどが起こっていた。『報知新聞』 1964年11月13日、『毎日新聞』 1964年11月13日・15日。
- 50) Y. Kasai, *ibid.*
- 51) 『J. S. A. D SPORTS』 第28号, p.7.

The “Legacy” of the 1964 Tokyo Paralympics

Kazuo Ogoura

The “legacy” of the Olympic Games is often discussed in terms of structures such as stadiums and athletes’ village, as well as the development of transportation networks and the enhancement of tourism facilities. Research on these matters is typically carried out from the perspective of rationalizing the injection of massive funds into the Olympics (economic perspective), rather than the perspectives of sports policies, diplomatic policies or social policies.

Such a tendency should, however, be re-examined very carefully, especially when examining Paralympics, as the ‘effects’ of Paralympics are more social and political rather than economic.

When examining the ‘legacy’ of the Tokyo Paralympics, it is important to explore what the Tokyo Paralympics left behind and what impacts they had on the international dimension, in addition to their influence and effects on Japanese society, considering that the Tokyo games were a significant event in the history of Paralympics (the first time the term ‘Paralympics’ was widely used) with major influences on the international Paralympics movements.

Based on this viewpoint, this paper examines the ‘legacy’ of the Tokyo Paralympics focussing on the following matters (although with some inevitable overlapping) :

A. Domestic perspectives

- (1) Impacts on Japanese athletes and Japanese people with disabilities
- (2) Impact on disabled sports and policies
- (3) Impact on disability measures (not limiting to those on sports)
- (4) Impact on society in general, e.g. international awareness, donation culture, volunteer spirit
- (5) Inspiration for technological development

(6) Miscellaneous, e.g. the involvement of the Imperial household

B. International perspectives (impact on the Paralympic movement)

- (1) Scope of participation of disabled athletes
- (2) Integration with able-bodied people
- (3) Expansion into Asia
- (4) Establishing identity (issues surrounding the name and the confirmation of the Paralympic spirit)

A. Impact of the Tokyo Paralympics on the Japanese sports community, people with disabilities and society at large

1. Impact and influence on participating athletes

Japanese athletes who participated in the Tokyo Paralympics felt joy and a deepened sense of self confidence in their participation. Shigeo Aono, who took part in the fencing event, recalls his sentiment at the time as follows:

“Some said we were out of our minds for trying to compete in fencing, a traditional western sport, after just eight months of practice. Yet, we rejected the naysayers, followed through with our intentions and managed to win the silver medal···, which gave us a powerful realization that we could do anything if we tried. That sense of confidence gave me strong insight and courage, which has been a guiding force of my life ever since.”¹

Masayoshi Koike, who competed in the discus event, expressed discontent with his performance, but said, “I had so much fun, with my spirit lifted high into the sky.”²

Japanese athletes compared themselves against participants from overseas and learned the importance of becoming more independent. Of 53 Japanese athletes who participated, all, except for five self-employed members, were receiving care either at home or at disability care facilities. Most of the athletes from overseas had worked··· and lived a life the same way as able-bodied persons did³. This difference forced Japanese Paralympians to face the importance of developing an independent frame of mind.

The importance of the independent frame of mind was clearly demonstrated when a team of Paralympians from Argentina, upon arrival in Japan, refused to use a lift vehicle provided by Japanese officials, and used crutches or had their arm around the shoulder of assisting Self-Defense Force personnel to walk down the gangway stairs by themselves to the wheelchairs on the ground⁴.

Another demonstration of overseas athletes' independent mindset was their day-to-day efforts to boost their physical strength and athletic abilities. Japanese athletes were reminded of the importance of maintaining and increasing physical strength in daily life, when they witnessed a large number of injuries sustained by their teammates during the Paralympics. Two Japanese athletes suffered Achilles' tendon injuries and 14 others sustained a range of other injuries during their respective events.⁵

Their reflection on the way of daily life extended not only to the development of physical strength but also to the type of equipment used. Japanese athletes became keenly aware of the substantial performance difference between their wheelchairs and those of overseas athletes.⁶ They also noticed their inferior skills in operating the wheelchairs, and became inspired to make improvements. Chiyuki Matsunaga and Tadamasa Kikuchi, who both competed in wheelchair slalom, had this to say:

"Overseas players are bigger but very skilled at handling wheelchairs. We looked more like the wheelchairs were handling us. Then again, the experience gave us confidence that practice would improve our skills."⁷

The most notable outcome of the Tokyo Paralympics was the offers of employment for participating Japanese athletes. Richard Maduro, who was a member of the U. S. team in the Tokyo Paralympics, competing in pentathlon and basketball, became impressed with the Japanese basketball team for their persistent performance right until the last minute in the game against the U. S. team despite losing by a massive margin. He contacted his fellow American, Justin Dart, who ran Japan Tupperware Co., Ltd. in Japan and was a long-time proponent of employing people with disabilities, and urged him to hire more of these Japanese disabled people with such dedication and determination. Following talks with Yutaka Nakamura, the director of a rehabilitation center in Beppu, where the athletes were based, Dart decided to seek

applications from disabled people not only from Beppu but also from the rest of Japan, and ended up employing seven applicants at Japan Tupperware⁸.

2. Influence and impact on disabled sports

Paralympics’ impact on disabled sports in Japan manifested itself not only in or after the event but in the process of preparation towards the Paralympics. The most typical example was seen in August 1961, when 24 disability-related organizations banded together to form the Disabled Sports Promotion Association, and organized the Parasport Athletic Tournament in October of the same year.

These developments became the trigger for transforming disabled sports, which had a more health-event characteristic, into highly competitive championships⁹.

In 1965, the year after the Paralympics, the first National Disabled Sports Games, covering events such as field athletics, swimming and table tennis, was held with the participation of 523 athletes with physical, hearing or vision disabilities¹⁰.

Amidst the disabled sports’ shift from ‘rehabilitation / recreation to full-fledged sports’, the Japan Sun Industries was established in Beppu, Oita Prefecture, a year after the Tokyo Paralympics, modeled after Britain’s pioneering rehabilitation facility Stoke Mandeville Hospital and built on the hospital of Dr. Yutaka Nakamura, who had long worked in the rehabilitation of those with disabilities. Several years later, its functional improvement center was expanded. Among those who underwent functional improvement trainings at the facility were two of five athletes representing Japan in the international disabled sports games in London in July 1969¹¹.

The Paralympics also had a significant impact on the mentality of spectators. The games made many of the Japanese spectators realize the beauty of disabled sports for the first time. Episodes like the one below, in particular, created the opportunity to acknowledge the power of disabled sports and why they move those who watch them.

“One female athlete from overseas had to be carried by her husband to get into the swimming pool. When the race started, she was left behind the rest straight away. By the time the first swimmer finished the race, she had only just swum about 5 meters. She would start sinking, but get back afloat. Rescue staff was swimming about 2 meters behind her just in case. When she began sinking after so many times,

the rescue staff proceeded to help, but her husband on the poolside used a hand gesture to tell them to stop. Two more meters to go..., one more meter... The progress was slow. Applause broke out in the spectators' stand. After more than three minutes, she finally completed the 25-meter feat."¹²

Episodes like this prompted eminent persons and sporting officials to express the opinion that "Disabled sports must be fostered as regular athletic events."¹³

3. General conditions surrounding the disabled, social mentality and impact on policies on the disabled

The Tokyo Paralympics was one of the opportunities for its general public to see people with disabilities with a different light, partly because of the energy and cheerfulness of overseas athletes.

"What left the greatest impression was... the uninhibited positive energy of overseas athletes," reported one newspaper with a title "Energetic Overseas Athletes"¹⁴.

Eiichi Machida, who was involved in the frontline administration of the Paralympics (Athletes' Village Administration Council's disability liaison manager), described how the games transformed the image of disabled people in Japan.

"We were stunned to see overseas athletes in wheelchairs, hanging onto the back of a slow-operating Athlete Village loop bus to hitch a ride. It was sheer astonishment to witness their energy, enjoying themselves at a dance party at the International Club, or catching a taxi at night and loading their wheelchairs as well to go to Shibuya's entertainment precinct."¹⁵

Such transformation of public perception was evident in an interview with the Paralympics' executive organizer Yoshisuke Kasai. Responding to a journalist asking whether a sporting event of disabled people would be too pitiful to watch, Kasai said, "Japanese people's perception of disabled people is at least ten years behind that of the West."¹⁶

Commenting on what fundamentally constituted "Japanese people's perception" in Kasai's statement about it being ten years behind that of the West, Seiichiro Ide, who was, like Kasai, from the Ministry of Health and Welfare and involved in the

Paralympics’ organizational and administrative activities, said, “Japan had the culture of shunning people with disabilities”. In this sense, according to Ide, “making the disabled more visible in society” was the new direction Japan adopted in shaping its policies for the disabled people¹⁷.

Furthermore, the Paralympics provided the opportunity to re-assess the capability of the disabled people. In his 1964 paper concerning the Paralympics, Yutaka Nakamura said, “Our society in general tends to underestimate the capability of people with disabilities. An event like this is significant in that it is a wonderful opportunity to demonstrate their capability to the rest of the society.”¹⁸

The Paralympics also highlighted the importance of independent living for the disabled people, not only among those with disabilities but also across society at large. Media gave broad coverage on how participating athletes gained greater confidence toward future independent living, while reporting public calls for taking Japan’s policies for the disabled people one step further¹⁹.

The games also had a considerable impact in terms of labor and medical affairs. For example, with regard to labor issues, Hanako Watanabe, expert in their field, released a report titled the “Cross-Section View of Labor Policies as Observed during the Paralympics”, arguing that sports facilitates disabled people’s workforce participation, and that sports and labor are inseparable issues. At the same time, she said that watching sporting events like the Paralympics brought powerful transformation of her understanding of working capabilities and values of labor with regard to the disabled and non-disabled people alike²⁰.

With regard to medical care, the Paralympics partially contributed to drumming up opinions among healthcare workers that the process of rehabilitation, traditionally handled separately to treatment, should be integrated into treatment. A healthcare worker had this to say:

“Modern medicine focused too much on diseases and ignored people who suffer from them. It was the case of hunters being too busy looking for deer to look at the mountain itself, as they say in Japanese. Take spinal cord injuries for example. If medicine had focused more on achieving patients’ recovery than merely treating the condition, I have no doubt that those with spinal cord injuries today would have enjoyed a higher level of physical recovery, even joining in on the funfair of the

Paralympics.”²¹

The view that rehabilitation should be embraced as a third form of medical care, following prevention and treatment, gained momentum after the Paralympics²².

A series of these effects and impacts won international recognition. A British Stoke Mandeville member who became involved in the Tokyo Paralympics as a member of the International Secretariat, said in her memoir that, for Japanese government officials and spectators, the Tokyo Paralympics were an eye-opener that helped them overcome long-standing prejudice against people with disabilities²³.

Alongside the change of mentality and perception, the government took (or initiated) a number of actions and measures. For example, a senior Health and Welfare Ministry official referred to the need to develop public housing that includes units specifically designed for those with disabilities²⁴. The general public also began calling for legislation that promotes the employment of those with physical disabilities²⁵. Furthermore, some newspapers ran editorials urging the integration of measures for those with disabilities, which were implemented by various government ministries and agencies separately at the time.

These developments culminated with the introduction of a set of specific measures, including the establishment of the counselor system. Ide described the system as follows:

“Under this system, counselors assist people with disabilities, and maintain active communication with disabled persons in their respective local areas”²⁶.

‘Visualizing’ the issues and requests disabled people have and actively presenting them to the rest of society helped successfully transform public perception of them from those that needed to be protected to those who should be supported to achieve their independent living. In 1967, the Act on Welfare of Physically Disabled Persons was amended in line with this perception shift. The National Rehabilitation Center was established in Tokorozawa City, Saitama Prefecture at the same time.

4. Broader social influence and impact

The effects the Paralympics had on Japan include sparking the internationalization of Japanese society and promoting international exchange.

One such example was a team of language volunteers (volunteer interpreters),

formed by the Japan Red Cross. When media reported this initiative, the American Red Cross responded. Numerous Americans traveled from U.S. military bases in Yokota, Tachikawa, etc. to a volunteer training center set up by the Japan Red Cross at their own expense, while Japanese participants were invited to American households to assist in the training. The initiative evolved quickly into the promotion of U. S. – Japan exchange²⁷.

The head of the U. S. Paralympic team, Benjamin Lipton, also offered to accept several Japanese people with disabilities to study at the school of watchmaking of which he served as the principal. Specific details were worked out in consultation with Isshin Watch Corp’s president Nishimura and other parties²⁸.

At the same time, the Paralympics also helped volunteer activities and volunteerism in various forms take root in Japanese society.

The abovementioned language volunteer team by the Japan Red Cross subsequently became the base for offering volunteer interpreters to a range of international sporting events across Japan. In addition, based on the experience of the volunteer interpreters who worked for a team of doctors at the Athletes’ Village, Red Cross hospitals across the nation started deploying volunteer interpreters to provide information, explanation and interpreting services to non-Japanese users²⁹.

Non-Red Cross activities included volunteers from Shibuya Ward’s women’s association cleaning the Paralympics venue Oda Field from 7 o’clock in the morning every day. While Olympics venues’ cleaning operation was, although by volunteers, organized upon ‘request’ from the Tokyo Metropolitan Government, Paralympic venues’ cleaning was literally ‘spontaneous’, reported as below:

(When the women’s association held a meeting to review their volunteer activities performed during the Olympics period) Some of the association members said, “It does not make any sense for us not to do the same during the Paralympics. Letting people with disabilities compete at venues littered with trash would be a disgrace to our town.” This convinced the association to voluntarily help with venue cleaning³⁰.

In addition to these organized operations, individual volunteers also contributed to the success of the Paralympics. For example, the umbrella store proprietor Shiro Ogishima found out that the Paralympics organizer was having trouble raising enough funds. Being also the chairman of the national bird-lovers’ association, he decided to ask pigeon breeders across the nation to provide birds to be featured in

the opening ceremony. Looking back at the experience, the proprietor said, “Most of them were reluctant, out of fear that their birds might get damaged in the process. I was very disappointed with the response. Then, to my absolute delight, one breeder offered to help. It was Takekichi Ishinabe, the chairman of the pigeon breeders’ group called the Tokyo Daiichi Association (Katsushika). Ishinabe had physical disabilities, too.”³¹

The Nippon Bartenders Association set up donation boxes at some 10,000 bars across the nation to raise funds, while the NHK Public Welfare Association was made in charge of managing the donations. The organization’s members called at several bars every day to collect donated money³².

In addition to personal donations, companies offered volunteers and other activities of social contribution. For example, the operator of kiosks at the Athletes’ Village was chosen smoothly for the Olympics, but no one came forward to run them for the Paralympics period. Then, the Seibu department store group accepted the duty, calling it the company’s ‘social responsibility’ even though there was little prospect of profitability³³.

These volunteer activities and initiatives went beyond ordinary fundraising and help during the Paralympics period. People moved by the performance of Paralympians began campaigns for greater social awareness. The association of the parents of children with progressive muscular atrophy, for example, started a campaign to educate employers about hiring people with disabilities³⁴.

5. The involvement of the Imperial Household and the participation of wounded ex-servicemen

One of the biggest features of the Tokyo Paralympics was the full-scale backing from the Imperial Household. As shown in the Appended Table (1) ³⁵, at least one of the members of the Imperial family went to see some events every day. Even after the Games ended, they extended full-scale cooperation and support to those involved. This experience helped them establish in-depth knowledge and interest in the Paralympics in general. It must be noted that the Imperial involvement came from their heart, rather than physical and systemic arrangement. A member of the Paralympics’ International Secretariat said, “When the Crown Prince and Princess unofficially invited the members of the Secretariat to the Imperial Palace, the Crown

Princess Michiko told us that their young prince made a Teru Teru Bozu doll to pray for sunny weather during the Paralympics³⁶.”

Such full-scale involvement of the Imperial Household had indirect association with the participation of wounded WWII ex-servicemen. Among 53 Japanese athletes who took part in the Tokyo games, there were a few ex-servicemen with spinal cord injuries, housed at the Hakone retreat in Kanagawa Prefecture³⁷.

In this way, the Tokyo Paralympics unwittingly served as a hidden, discreet catalyst for healing the scars from WWII in Japanese society.

In a way, the Paralympics presented an opportunity to contemplate the meaning of peace in depth. The Swedish Paralympian Erik Johansson, who suffered spinal cord injury from infantile paralysis, had this to say:

“Fortunately, Sweden was able to maintain neutrality during WWII. That is why, unlike other countries, we do not have wounded ex-servicemen. A lot of fellow Paralympians seem to be ex-servicemen. I hate war³⁸.”

6. ‘Assets’ concerning technologies and cultures, and their impact

The greatest technological impact the Paralympics had was on the development and proliferation of equipment and tools for the care of those with disabilities, which were still underdeveloped in Japan at the time. There was a clear performance gap between foreign-made and Japanese wheelchairs and urine collectors, etc. Commenting on this matter, Yutaka Nakamura said, “The difference of wheelchairs was as clear as day. British sport-use wheelchairs weighed 13 kilograms, whereas Japanese wheelchairs were as heavy as 23 kilograms. Overseas players had wheelchairs made to suit their physique, while Japanese sport wheelchairs were the case of one-size-fits-all. This represented a form of delay or even destitution.

In those days, there was no proper urine collector of satisfactory performance in Japan. Most people with spinal cord injuries used a simplified version. Nakamura had to import several from the United States just before the Games, to have enough supplies for all the participants. Yet, since the Japanese athletes were not used to the system, some reported difficulty in concentrating on their play³⁹.

The delay in developing the equipment and tools forced the nation to reflect on the fact and encourage subsequent development. At the same time, athletes with disabilities and their supporters came to re-acknowledge the issue of ‘skills’ in

handling the equipment. This has already been referred to in section A. 1, above.

Cultural impacts of the Paralympics can be divided into the impact concerning the introduction of Japanese cultures abroad, and the impact on fine arts activities in Japan.

Cultural events held during the Paralympics served the role of introducing Japanese cultures. The cultural events, mostly under the 'Paralympics Theater' program shown in the Appended Table 2 below, included the demonstration of traditional martial arts such as Kendo, Kyudo and Aikido, the performance of traditional Japanese dance and the screening of Japanese films⁴⁰.

While the direct impact of these events is difficult to evaluate, the footage of Argentinian Paralympians dressed in Kimono and having a photo taken, indicates the level of interest in Japanese cultures generated among athletes and staff from overseas.

Domestically, the games firstly inspired the creation of some arts, including the theme music "Paralympic Sanka (Hymn to the Paralympics) " (Appended Table 3) and the movie "Ai to Kando no Saiten (Festival of Love and Inspiration) " by Daiei.

Media also reported the buildup of momentum in some regions to boost the cultural activities of disabled persons in Japan⁴¹.

7. The legacy or impact of the 1964 Tokyo Paralympics on international Paralympic movements

As examined thus far, the Tokyo Paralympics dealt various impacts on the host country, Japan, in terms of disabled sports and a range of measures for people with disabilities. At the same time, the event had direct and indirect effects on the subsequent direction of the Paralympics internationally, while playing a role in reaffirming and spreading the spirit or philosophy of Paralympics. International documentation has few references in this regard, but detailed examination of Tokyo Paralympics records reveals some important points.

They are (1) the scope of disabled people participating in the Paralympics, (2) integration of disabled people and non-disabled athletes, (3) establishment of Paralympics' international identity and name, (4) reaffirmation that Paralympics could be a positive catalyst for generating a sense of unity among people around the world, and (5) spread of the Paralympics movement into Asia.

(1) Scope of disabled people participating in the Paralympics

Previously, international sporting events for the physically disabled were designed only for those with spinal cord injuries according to the Stoke Mandeville tradition of Paralympics, with Britain taking a leading role due to the historical background (as seen in the fact that the British team was always the first to march into an opening ceremony in the early days of the Paralympics). However, in the 1960s, there emerged a growing call for including those with vision impairment and amputees in such sporting events (while people with hearing impairment were treated separately as there was already an international sporting event for such people). Following the establishment of an international federation for people with disabilities led by parties including German Brinkmann, the first international games for people with disabilities was held in the Austrian town of Linz in July 1963. During the preparation stage for the Tokyo Paralympics, Yutaka Nakamura, who was one of the event’s central figures, campaigned in response to requests from German officials to include athletes with vision impairment and amputees in the 1964 Tokyo Paralympics but failed to secure consent from Stoke Mandeville officials⁴².

Yet, the opinion that a broader range of disabled persons should be allowed to participate in the Paralympics, began to gain momentum even within Japan. In the end, the Tokyo games were held in two parts, namely Part I as the formal Paralympics exclusively for those with spinal cord injuries, and Part II as a domestic sporting event for people with physical disabilities in general. Due to some circumstances leading to the decision, the German team made a guest participation in Part II as well.

The circumstances that led to Part II participation only by Germany were as follows: When Japan decided to hold an event that covered other types of disabled athletes, several countries expressed their interest in sending in their teams. However, the Japanese organization committee was reluctant to accept international participants, as the domestic event did not even have clear competition rules defined at the time. Feeling, however, that they could not ignore the wish of these countries, the committee extended an invitation to West Germany, France and Austria. It was only Germany that decided to actually take part⁴³.

One of the reasons West Germany was enthusiastic about participating in the event, was the 1957 formation of the German Disabled Sports Association (DVS)

following the buildup of momentum to integrate all disabled sports organizations since the late 1950s⁴⁴.

While the Tokyo games were divided into two parts with Part II primarily being a domestic competition, the event still marked the start of official moves to broaden the scope of participants for Paralympics. In this sense, it dealt an impact on the subsequent direction of the Paralympics.

(2) Integration of people with disabilities with non-disabled people

Even today, Olympians and Paralympians are often treated separately in practical terms (For example, the welcome-home parade for Japanese athletes returning from the 2012 London Olympics / Paralympics only featured Olympians). In contrast, British Olympians and Paralympians, returning from the Tokyo Olympics / Paralympics, jointly attended a reception hosted by the Mayor of London and paid a courtesy visit to the Prime Minister⁴⁵. This was a hidden 'legacy' of the Tokyo event.

(3) Establishment of the term 'Paralympics'

The term 'Paralympics' became established among Japanese media organizations after the Tokyo event, which was reported, almost without exception, as 'Paralympics'. The same applied to English-language newspapers, as seen in the article "Paralympics Open -- 369 Wheel-Chair Athletes Taking Part" in the November 9, 1964 edition of the Mainichi Daily News.

(4) Closing ceremony

Prior to the Tokyo event, Paralympics did not hold a closing ceremony in line with the tradition of the Stoke Mandeville Games. The Tokyo Paralympics were the first to stage a formal closing ceremony, setting a new tradition for subsequent events⁴⁶.

(5) Affirmation of the founding spirit of the Paralympics

The Tokyo Paralympics was a sporting event with a very high standard of performance compared to the level of disabled sports at the time in Japan. Yet, the original philosophy of disabled sports competitions, with heavy emphasis on 'participation' and 'friendship' was strongly put to the fore, more so than in similar events today.

The event was filled with a 'feel-good' atmosphere like sports day at school, as seen in the following episode:

In basketball, the Japanese team lost to all other countries in a massive margin, e. g.

6 – 60. When a Japanese player missed the hoop, the opposing U.S. team even offered the player to give it another go⁴⁷.

Media also reported the following episode:

In wheelchair slalom, an Italian player was seen advising a Japanese competitor how to maneuver through posts⁴⁸.

Such ‘feel-good’ scenes are characteristic of the Paralympic Games. The atmosphere helped reaffirm and re-acknowledge the spirit of Paralympics in those days⁴⁹.

The Tokyo Paralympics also allowed non-competing locals with disabilities to visit the Athletes’ Village to communicate with overseas athletes⁵⁰. These initiatives were designed to establish the event as a venue of networking in a broad sense, actualizing the founding ideal of the Paralympics.

(6) Expansion into Asia

The Tokyo Paralympics was the first to receive athletes from Fiji, Ceylon and the Philippines, contributing to the proliferation of the Paralympics movement into Asia.

This trend eventually culminated in the 1985 FESPIC (Far East and South Pacific Games for the Disabled) Games. In the article “Looking back at the 31 year history of FESPIC”, the FESPIC Federation chairman Kazuo Hatada said:

“In the 1970s, the only international sporting events for the disabled were the International Stoke Mandeville Games, the International Games for the Physically Handicapped and the World Games for the Deaf, limiting the opportunities to compete in sports for disabled athletes in Asia and the South Pacific region. Dr. Yutaka Nakamura approached people like Hong Kong’s Dr. Harry Fang and Australia’s Dr. John Grant to create an event in which disabled athletes in Asia and the South Pacific could participate without having to travel to Britain for the Stoke Mandeville Games, thereby improving the understanding and welfare for the population with disabilities in the region⁵¹.”

Appended Table 1

November 8 (Sun)

The honorary president His Imperial Highness the Crown Prince and Her Imperial Highness the Crown Princess of Japan

Attending the opening ceremony of the international segment (Part I).

10:10 a. m.~11:00 a. m. Oda Ground, Athletes' Village

Their Imperial Highnesses the Prince and Princess Mikasa

Viewing some events in the international segment (Part I).

2:00 p. m.~3:00 p. m. Oda Ground, Athletes' Village

Javelin throw, wheelchair slalom, pentathlon (field event)

3:05 p. m.~3:45 p. m. Archery Hall, Athletes' Village

Archery

Her Imperial Highness the Princess Chichibu

Viewing some events in the international segment (Part I).

2:30 p. m.~3:00 p. m. Oda Ground, Athletes' Village

Javelin throw, wheelchair slalom, pentathlon (field event)

November 9 (Day 2)

The honorary president, His Imperial Highness the Crown Prince and Her Imperial Highness the Crown Princess of Japan

Viewing some events in the international segment (Part I).

3:00 p. m.~3:20 p. m. Oda Ground, Athletes' Village

Field events, javelin throw, shot-put, discus throw, club throw

3:25 p. m.~3:45 p. m. Annex, National Gymnasium

Basketball

3:48 p. m.~4:00 p. m. Archery Hall, Athletes' Village

Pentathlon (archery)

November 10 (Day 3)

Their Imperial Highnesses the Prince and Princess Hitachi

Viewing some events in the international segment (Part I).

7:00 p. m.~7:20 p. m. National Gymnasium

Table tennis

7:25 p. m.~8:00 p. m. Indoor Aquatic Center, Tokyo Metropolitan Gymnasium

Swimming

November 11 (Day 4)

Her Majesty the Empress and Their Imperial Highnesses the Crown Prince and Princess

Viewing some events in the international segment (Part I).

2:50 p. m.~3:22 p. m. Annex, National Gymnasium

Basketball (Japan vs. U. K.)

3:28 p. m.~3:40 p. m. Archery Hall, Athletes' Village

Archery

Their Imperial Highnesses the Prince and Princess Hitachi

Viewing some events in the international segment (Part I).

7:00 p. m.~7:30 p. m. National Gymnasium

Weight lifting

7:35 p. m.~8:05 p. m. Shopping center, Athletes' Village

Fencing (epee)

November 12 (Day 5)

Their Imperial Highnesses the Prince and Princess Mikasa and His Imperial Highness Prince Tomohito of Mikasa

Viewing some events in the international segment (Part I).

9:00 a. m.~9:30 a. m. Shopping Center, Athletes' Village

Fencing (sabre)

9:35 a. m.~10:30 a. m. Annex, National Gymnasium

Basketball

The honorary president, His Imperial Highness the Crown Prince and Her Imperial Highness the Crown Princess of Japan

Attending the closing ceremony of the international segment (Part I).

5:00 p. m.~5:38 p. m. Annex, National Gymnasium

November 13 (Day 6)

The honorary president, His Imperial Highness the Crown Prince and Her Imperial Highness the Crown Princess of Japan

Attending the opening ceremony of the domestic segment (Part II).

9:00 a. m.~9:40 a. m. Oda Ground, Athletes' Village

Viewing some events in the domestic segment (Part II)

11:00 a. m.~11:30 a. m. Oda Ground, Athletes' Village

100 meters sprint, triple jump, high jump, shot put, 60 meters sprint, 100 meters hurdles

November 14 (Day 7)

Their Imperial Highnesses the Prince and Princess Hitachi

Viewing some events in the domestic segment (Part II)

9:00 a. m.~9:30 a. m. Archery Hall, Athletes' Village

Archery

9:33 a. m.~10:00 a. m. Oda Ground, Athletes' Village

100 meters sprint, long jump, club throw, shot put, standing jump, wheelchair slalom

His Imperial Highness the Prince Mikasa

Viewing some events in the domestic segment (Part II)

10:30 a. m.~11:30 a. m. Oda Ground, Athletes' Village

1500 meters, 5000 meters, shot put, long jump, standing jump

The honorary president, His Imperial Highness the Crown Prince and Her Imperial Highness the Crown Princess of Japan

Attending the closing ceremony of the domestic segment (Part II)

5:00 p. m.~5:20 p. m. Annex, National Gymnasium

Appended Table 2

Paralympics Theater

November 9 (Monday)

Movie 8 p. m.~9:30 p. m.

1. Today's Japanese Agriculture
2. Japanese Family Life
3. Japan's National Parks (Kyushu edition)

November 10 (Tuesday)

Ancient martial arts 8 p. m.~10 p. m.

1. Ogasawara archery, ceremonial style
2. Japanese Kendo swordsmanship, Kata
3. Shindo Muso-ryu Jodo
4. Toda-ha Buko-ryu Naginata-do, Kata
5. Jikishin Kageryu Kendo, Kata
6. Isshin-ryu Kusarigama-jutsu
7. Shinkage-ryu Jojutsu
8. Kashimashin-ryu Kenjutsu, Jojutsu and Sojutsu
9. Tendo-ryu Naginata-do, Kata
10. Ikkaku-ryu Jitte-jutsu
11. Sutetsuki-jutsu
12. Wado-ryu Karate-do
13. Jikishin Kage-ryu Naginata-do, Kata
14. Shin-do Muso-ryu Jojutsu
15. Aikido
16. Hasegawa Eishin-ryu Iai-do

November 11 (Wednesday)

Movies 8 p. m.~9:30 p. m.

1. Japanese industries
2. Two-week trip of Japan
3. Japan's National Parks (Honshu edition)

November 12 (Thursday)

Variety show 8 p. m.~10 p. m.

1. NHK Television Entertainment Hall / Grand Kagura performance, spinning tops, paper-cutting
 2. Whistling performance by Daizo Tamura and the musical volunteer team
 3. Japanese traditional dance by the Syu Hanayanagi Company and the Tokyo Mothers Group
- A. Echigo Jishi B. Shima-no Chitose C. Yosakoi Bushi D. Gorin Ondo
E. Momiji no Hashi F. Hietsuki Bushi G. Kojo-no Tsuki H. Konohi-no Tameni

Appended Table 3

Hymn to the Paralympics

Lyrics by Erio To

Music by Nobuaki Takana

Paralympics, Paralympics

Praise the spirit of the games.

Gather fellow athletes from around the world to present our spirit and skills.

Foster a healthy mind and train each day with dedication.

Our hopes are brought together, and our friendship comes together to create massive force
that covers the entire globe as we nurture peace in this world.

Notes

- 1 Tokyo Paralympics Report (1965, hereinafter "Report") p.205.
- 2 "Oita Godo (hereinafter 'Oita') newspaper, November 10, 1964 issue: In some events, athletes were scarce and had to be 'hunted'. Archers in the western-style archery event, which was not played widely, were forced to practice, sacrificing work hours and hence their livelihood. Some complained of the burden." (Asahi newspaper (evening edition), November 12, 1964 issue)
- 3 The Yutaka Nakamura Biography Publication Committee, "Yutaka Nakamura Biography" (1988, hereinafter "Nakamura"), p.100.
- 4 "Oita", November 5, 1964 issue
- 5 "Nakamura" p.100
- 6 "Oita", November 9, 1964 issue, evening edition
- 7 "Oita", November 9, 1964 issue
- 8 "Nakamura", pp.115-116.
- 9 "Report", p.24.
- 10 Japanese Para-Sports Association, "Twenty-Year History of JPSA" (1985, hereinafter "20-Year History"), p.75-
- 11 Tsuneo Kobayashi and Taiji Shirakawa, "Records of the Japan Sun Industries" (NHK, 1969), p.137
- 12 "Asahi Newspaper", November 12, 1964 issue, evening edition
- 13 "Niigata Shimpō", November 12, 1964
- 14 "Asahi Newspaper", November 12, 1964 issue, evening edition
- 15 "20-Year History", p.38
- 16 "Hideo Aragaki Interview Series, Face of the Time 68", "Shukan Asahi", October 23, 1964 issue
- 17 "Interview with Seiichiro Ide", "Yomiuri Premium", November 8, 2014 issue
- 18 "Nakamura" p.111
- 19 "Niigata Shimpō", November 12, 1964 issue
- 20 "Shukan Rodo News", November 16, 1964 issue
- 21 Mitsuharu Kawasaki, "Monday Essay: Rehabilitation for the Disabled", "Kanagawa Newspaper", December 7, 1964 issue
- 22 "Nakamura", p.111.
- 23 Joan Scruton, *Stoke Mandeville: Road to the Paralympics*, Peterhouse, 1998, p.315.
- 24 "Niigata Shimpō", November 12, 1964 issue
- 25 "Call for legal requirement: Promotion of disabled employment", "Mainichi Newspaper", Letter to the Editor section, November 20, 1964 issue
- 26 Previously listed, "Interview with Seiichiro Ide"
- 27 Disability Information Resources "International Sports Games for the Disabled / Paralympic Games Report", No.3
- 28 "Mainichi Newspaper", November 14, 1964 issue
- 29 Based on an interview with Masaki Sato, who was involved in the project management of the language volunteer team together with Sachiko Hashimoto, who was the manager of youth programs at Japan Red Cross in 1964
- 30 "Asahi Newspaper", November 13, 1964 issue
- 31 "Yomiuri Newspaper", November 13, 1964 issue

- 32 “20-Year History”, p.30
- 33 “20-Year History”, p.38
- 34 “Asahi Newspaper”, December 8, 1964 issue
- 35 “20-Year History”, pp.63-64
- 36 Scruton (1998), p.312.
- 37 “Nakamura”, p.99, according to the article in the Mainichi dated Nov. 14, 2014, there were two ex-service men who participated in the Games.
- 38 “Tokyo Newspaper”, November 14, 1964 issue
- 39 “Nakamura”, p.101
- 40 “Report”, p.72
- 41 Regarding the 7th cultural festival in Niigata, organized by the federation of physically handicapped people’s associations, media reported that the Paralympics in Tokyo in that year raised public interest in people with physical disabilities, thereby building momentum for the cultural festival at the same time. “Niigata Shimpō”, November 24, 1964 issue
- 42 For the developments, see “Nakamura”, pp.80-82.
- 43 Friction within relevant German organizations concerning Germany’s participation was referred to in Y. Kasai “Hosts to the Games in Tokyo” in *The 1964 International Stoke Mandeville Games for the Paralyzed in Tokyo*, Hunt Bernard, UK, 1964 and Ian Britain, *From Stoke Mandeville to Sochi: A History of the Summer and Winter Paralympic Games*, Common Ground, 2012, p.68.
- 44 Ulrike Adomat, *Die Vermarktung eines Sportlers mit Behinderung: Darstellung am Beispiel des mehrmaligen Paralympic - Teilnehmers Reinhold Bötzel*, Vdm Verlag Dr. Müller E. K., 2013, pp.46-47.
- 45 Scruton (1998), p.315.
- 46 Previously listed, “Interview with Seiichiro Ide”
- 47 “Asahi Newspaper”, November 12, 1964 issue
- 48 “Mainichi Newspaper”, November 15, 1964 issue
- 49 Since rules for individual events were not established, proliferated or enforced clearly at the time, the Tokyo games were plagued with numerous issues including corrections to event results, postponement of medal-awarding ceremonies, cancellation of commendations and scoring mistakes. “Hochi Newspaper”, November 13, 1964 issue. “Mainichi Newspaper”, November 13 and 15, 1964 issues
- 50 Y. Kasai, *ibid.*
- 51 “J. S. A. D SPORTS”, 28th issue, p.7.

国内外一般社会での パラリンピックに関する認知と関心

佐藤宏美

調査の概要

日本財団パラリンピック研究会では、一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心の度合いを把握するため、笹川スポーツ財団の協力を得て、国内およびアメリカ、オーストラリア、韓国、ドイツ、フランスの計6ヵ国で世論調査を実施した。国内大手調査会社および同社の海外提携企業にアンケート・モニターとして登録されている1,450万人の中からインターネットを通じて回答を募り、国内では2014年9月19日から21日に約1,560件、海外の5ヵ国では同年9月から10月の各約5日間にそれぞれ約530件、合計4,205件の有効サンプルを回収した。回答者は、20代から60代の男性と女性で均等に割り付けた。日本ではさらに、東日本と西日本で均等割り付けを施したが、海外の回答者居住地域は、都市部を中心とした一部地域に限られる。

調査結果

1. 日本におけるパラリンピックの認知・関心と国際比較

(1) パラリンピックの認知度

最初に、パラリンピックの内容を知っているか、名称を見たり聞いたりしたことがあるか（以下、名称認知）を質問した。内容を知っていると回答した人は77.1%であった。内容を知る人の比率は年齢層に比例して上昇し、20代男性が最少で68.6%、60代女性が最多で85.3%であった。どの年代層でも女性の認知が男性を上回った。これに名称認知を加算した数値「認知度」は、図1のとおり98.2%と、日本ではほぼ全ての人がパラリンピックを知っていると言えることが明らかになった。

スペシャル・オリンピックとデフリンピックについても同様の問を発したが、名称認知を含めた認知度はスペシャル・オリンピックが19.8%、デフリンピックが11.2%であり、パラリンピックの認知度が格段に高いという結果が表われた。

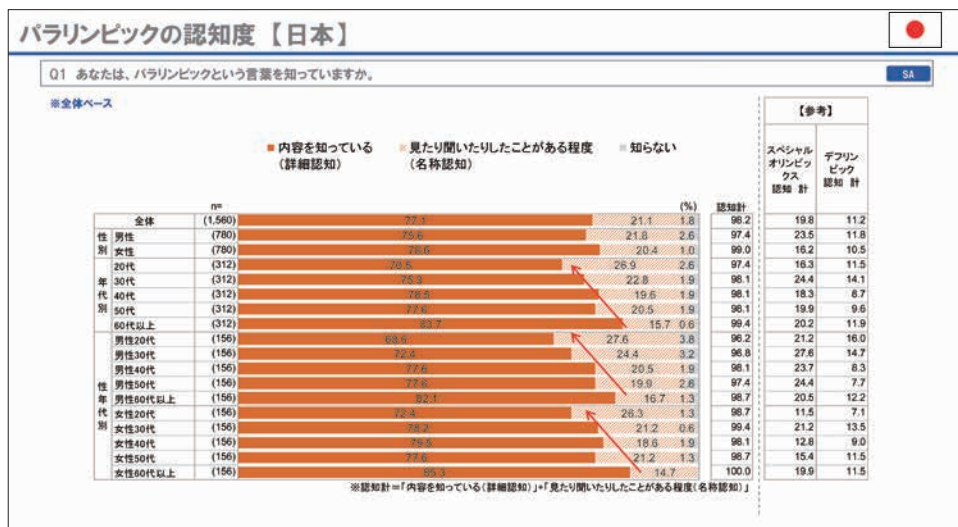


図 1

図2は、同じ設問に対する各国での回答を比較したものである。ドイツおよびフランスで95%以上がパラリンピックを認知する一方、アメリカ71.1%、韓国74.7%と、この両国では認知度が低い。特にアメリカでは内容を知っている人が2割台にとどまる。海外各国との比較から、日本でのパラリンピックの認知度は世界トップの水準にあると言えることができる。

アメリカではスペシャル・オリンピックス(94.0%)、韓国ではデフリンピック(59.4%)の認知度が他国との比較において突出して高いことが示された。

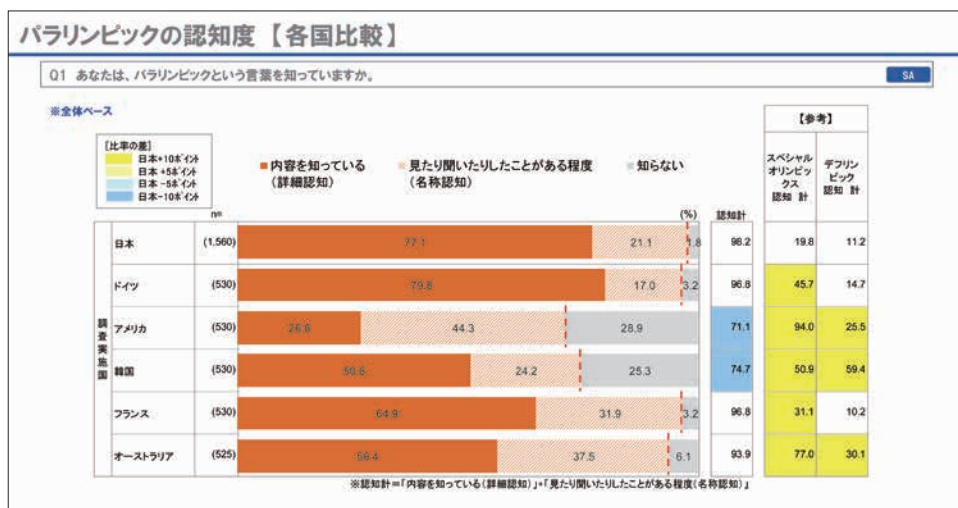


図 2

次に、認知の深さを測るため、どの種類の障害者がパラリンピックに参加するかを尋ねたところ、認知度の高さに反して、パラリンピックの内容を正しく理解する人は極めて少ないことが判明した。図3に示されるように、肢体不自由、視覚障害、知的障害の3つがパラリンピック競技の対象に含まれ、聴覚、発達、内部、精神の各障害は対象に含まれないことを、すべて正しく回答した人は、国内では全体の0.5%に過ぎない。過半数の人が聴覚障害者に参加資格があると誤解する一方、視覚障害の参加に関する認知が6割に満たないなど、正しい知識の普及には至っていない。知的障害の参加が知られていない背景には、シドニー大会（2000年）で不正があった後、ロンドン大会（2012年）の一部競技（陸上、水泳、卓球）で復帰するまで知的障害者の参加がなかったことが影響しているかもしれない（注：現在、冬季大会には知的障害者を参加者に含む競技はない）。他方、陸上、柔道などの競技で視覚障害を持つ日本のアスリートの活躍が多いにもかかわらず、4割以上の人が視覚障害者はパラリンピックに参加しないと誤解していることは予想外であり、認知の浅さを裏付ける結果と言わざるを得ない。

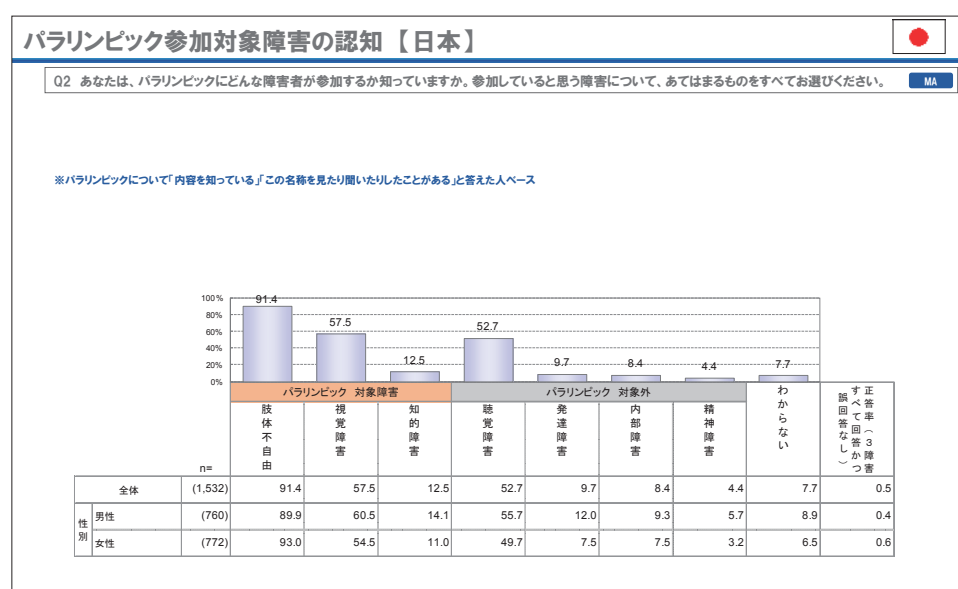


図3

図4は、同じ設問に対する回答の国際比較である。海外でも、どの障害を持つ人がパラリンピックに参加するかを正しく理解する人の比率は軒並み低い。オーストラリアで3.0%、ドイツで1.3%の正答者があったが、それ以外の国ではいずれも正答率が1%未満にとどまる。アメリカでは、視覚障害が含まれないという誤解（85.9%）、フランス、韓国、ドイツでは日本と同様に、聴覚障害が含まれるという誤解（各5割前後）が多い。

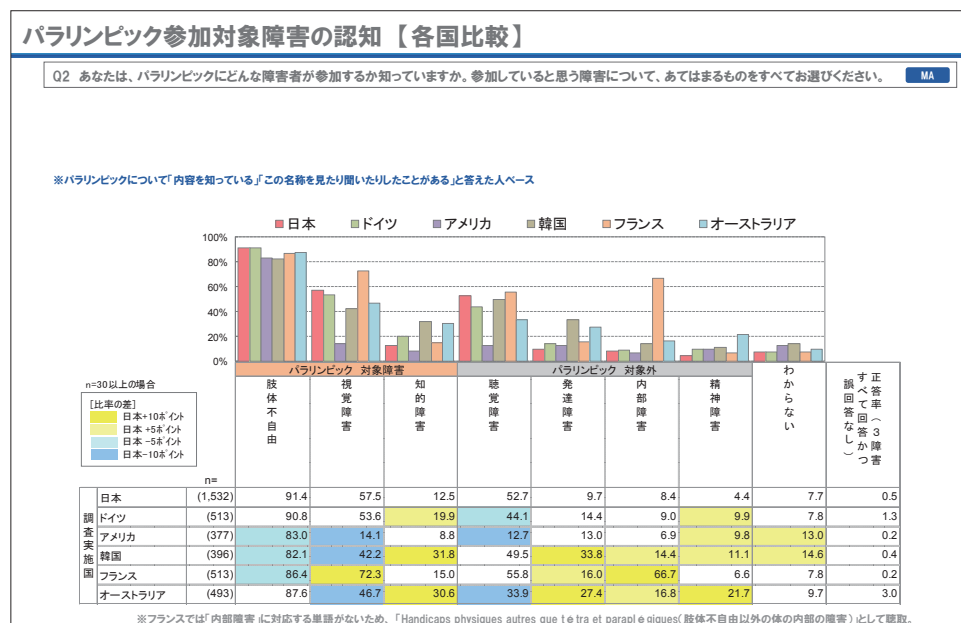


図4

(2) メディアを通じたパラリンピック経験

続いて、パラリンピックを認知する人を対象に、中継や関連の報道に触れた経験をメディア別に尋ねた。図5に示されるように、パラリンピックに関するメディア報道に触れたことのある人は国内で9割に達する。49.0%の人がテレビで競技の中継を、69.6%の人がテレビでニュース・特集番組等を見たことがある。テレビと並んで新聞・雑誌による報道も数値を押し上げている。その一方で、インターネットの中継等動画の視聴経験者は少ない。若い男性にはインターネット接触者が比較的多いものの、全体の平均では、競技観戦経験者が2.9%、その他動画の視聴経験者が4.5%と低い値にとどまる。媒体別でみると、テレビでの視聴経験者が84.3%、インターネットが13.4%、新聞・雑誌が31.2%となる（詳細データ省略）。

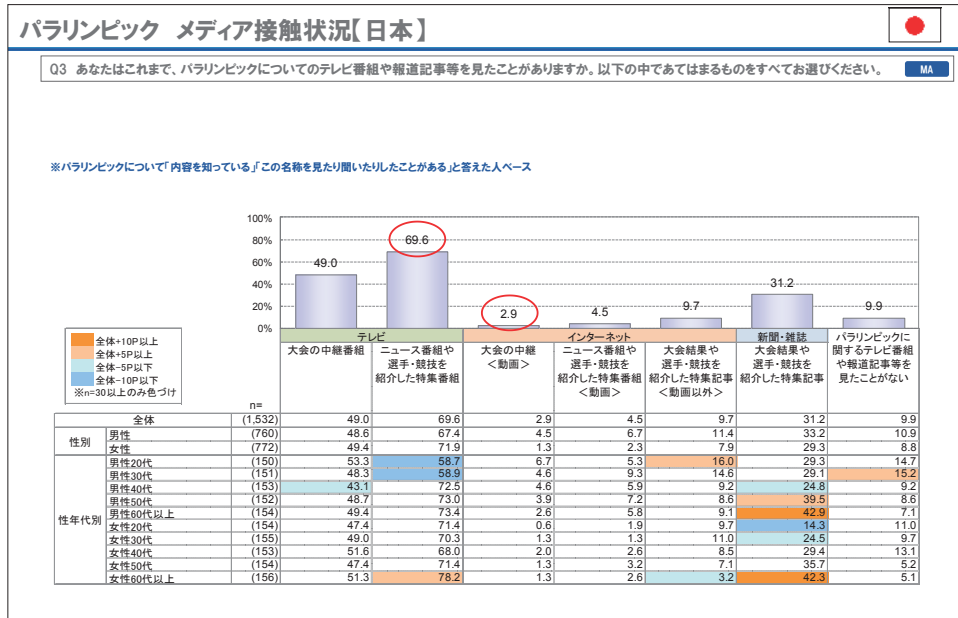


図5

同じ設問の各国比較を示した図6には、日本のニュース・特集番組など競技中継以外のテレビでのパラリンピック接触経験が、他国と比べ群を抜いて多いこと、また、韓国、オーストラリア、アメリカで、インターネットでの接触経験者が多いこと、さらに、日本ではいずれかのメディアを通じてパラリンピックに接した経験のある人（90.1%）が韓国（92.2%）に次いで多いことが示される。韓国は、インターネット中継に加えて、新聞およびインターネット記事による情報入手も、6ヵ国中で最多である。アメリカ、ドイツ、オーストラリアには、いずれのメディアでもパラリンピック報道に接した経験のない人がそれぞれ2割以上存在する一方、若年層でインターネットないしは新聞への接触度が比較的高いという特色もみられる。インターネット視聴率の6ヵ国平均が中継6.7%、その他動画9.0%であるのに対し、日本では中継2.9%、その他動画4.7%と、6ヵ国平均の半分程度にとどまる（詳細データ省略）。インターネット視聴が能動的な接触であるという特徴を踏まえると、他国に比べ、国内のメディア接触には積極的な姿勢に欠ける傾向が窺われる。

パラリンピック メディア接触状況【各国比較】

Q3 あなたはこれまで、パラリンピックについてのテレビ番組や報道記事等を見たことがありますか。以下の中であてはまるものをすべてお選びください。

MA

※パラリンピックについて「内容を知っている」「この名称を見たり聞いたりしたことがある」と答えた人ベース

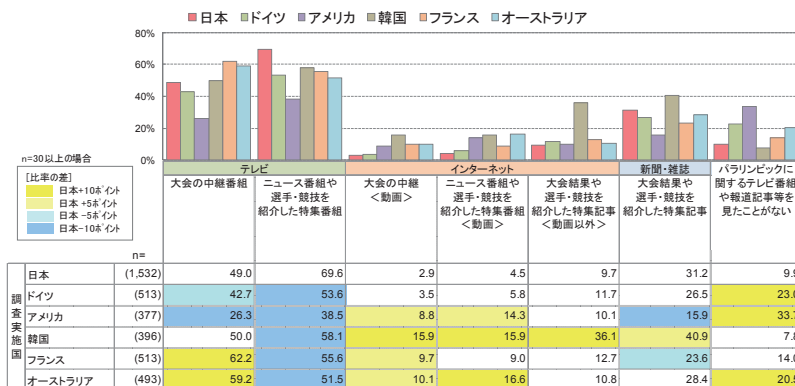


図6

テレビまたはインターネット動画で大会の中継を視聴したことがある人の観戦した競技は、図7のとおり、上位から順に、車いすテニス（59.4%）、車いすバスケット（58.3%）、陸上（46.6%）、アルペンスキー（42.5%）、水泳（33.2%）であった。一方、パラリンピック競技25のうち14と過半数の競技で、観戦経験を持つ人が1割未満にとどまる。日本ではテレビでのパラリンピック接触経験が多い中、観戦される競技は一部に限られることが明らかになった。

パラリンピック競技の観戦経験【日本】

Q4 以下のパラリンピックの競技のうち、テレビもしくはインターネット動画で観戦したことのあるものをすべてお選びください。
※競技場での生観戦を含めずにお答えください。

MA

※パラリンピックについてテレビもしくはインターネット動画で大会の中継番組を見たことある人ベース

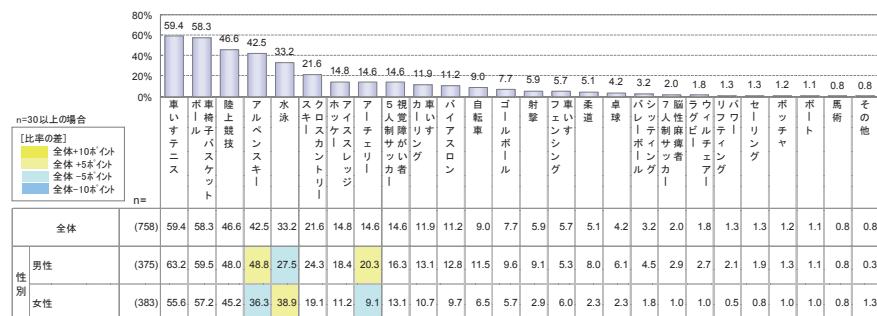


図7

図8は、6カ国での同じ問いの結果を日本の順位で並べかえ、6カ国の平均値を棒グラフで示したものである。車いすバスケットボール（59.1%）、陸上（43.8%）、水泳（38.0%）、車いすテニス、アルペンスキー（いずれも28.2%）が、総じて高順位にある。6カ国の比較から、日本での車いすテニスの観戦経験の多さが際立つ。また、韓国のアーチェリー（51.6%）、アメリカの自転車（23.3%）、韓国およびアメリカの卓球（韓国42.1%、アメリカ18.1%）の観戦率の高さにも特徴がみられる。日本の車いすテニスの例に象徴されるようにスター選手の存在や、韓国のアーチェリーのように健常者スポーツを含めた競技の人气が、中継機会の多さと観戦人気につながると言えそうである。他国に比べて日本で中継が少ない競技は、ウィルチェアラグビー、卓球、馬術、ボート、パワーリフティングなどであった。

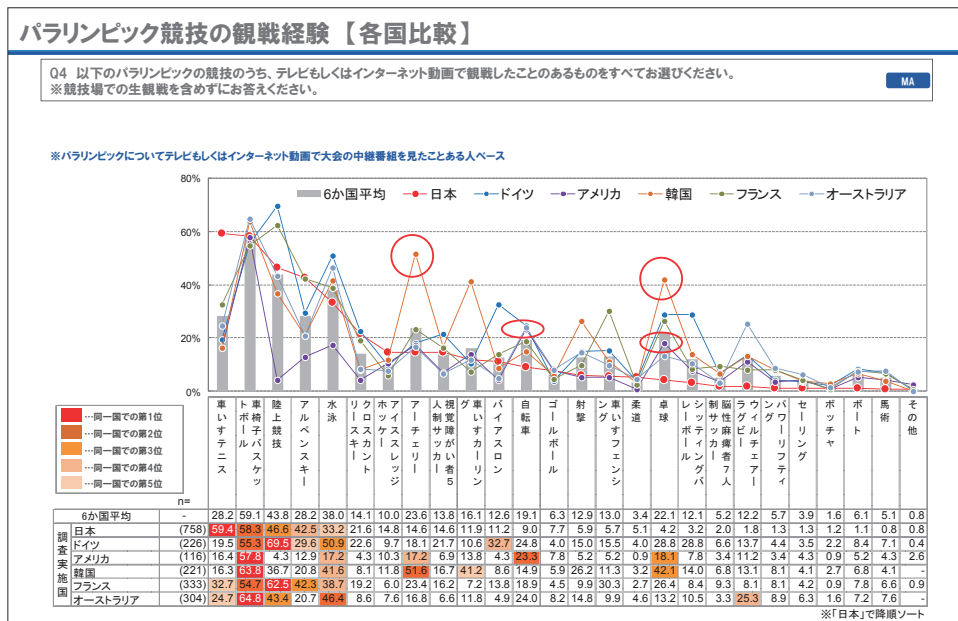


図8

(3) 障害者スポーツの直接観戦経験

国際比較の最後の問いとして、パラリンピック以外の障害者スポーツの直接観戦経験を全員に尋ねた。その結果、図9のとおり、18.9%のドイツ、17.9%のアメリカを先頭に、他国でいずれも10%以上にのぼるのに対し、日本では直接観戦経験のある人が4.7%と低迷していることが明らかになった。なお、「経験がある」の回答には、能動的な観戦に加えて、例えばマラソン大会に車いすや伴走車とともに走る視覚障害者の姿を目にしたケースなどが含まれると推測される。

パラリンピック以外の障害者スポーツ 直接観戦経験【各国比較】

Q5 あなたは、これまでにパラリンピック以外の障害者スポーツを直接観戦したことがありますか。

SA

※全体ベース

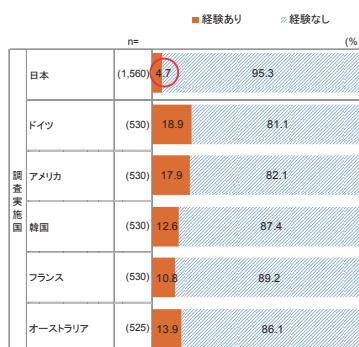


図9

2. 2020年東京パラリンピック大会に向けた国内の関心

国内における2020年東京パラリンピック大会への関心の度合いとその内容を把握するために、日本のみを対象に、同大会の観戦希望、ボランティア参加希望、そして期待するもの、の3項目を質問した。

(1) 観戦希望

大会を、会場で観戦したいか、メディアによる中継で観戦したいか、あるいは希望がないかを尋ねたところ、図10のとおり、会場で観戦したい人が15.4%、テレビやインターネットで中継を見たい人が61.3%で、合計76.7%の人が観戦を希望しているという結果が得られた。

参考のため、2020年東京オリンピック大会の観戦希望についても同様に質問したが、その回答を比較すると、中継を見たい人はオリンピックの中継観戦希望（59.7%）を上回るが、会場で直接観戦したい人は15.4%と、オリンピックでの希望（30.2%）の約半分にとどまる。若い人に直接観戦の希望が強く、年配者は中継を期待する傾向は、オリンピックと共通する。

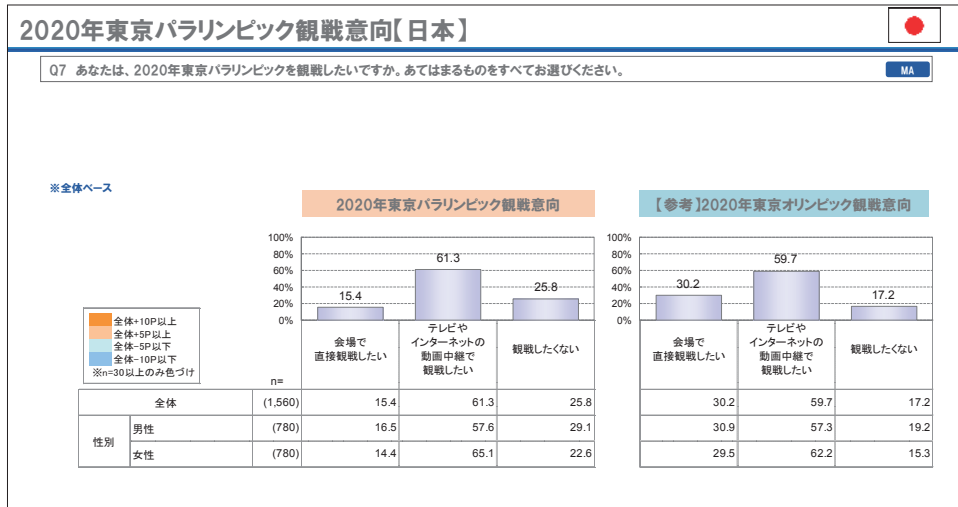


図10

(2) ボランティア参加意向

ボランティアとしてパラリンピックに参加する意向については、図11に示すように、6.0%の人がボランティアを「是非行いたい」、21.0%の人が「できれば行いたい」と答え、合計で27.0%の人が参加意向を持つことが明らかになった。「是非行いたい」という回答では、男性が女性を上回る。また、20代では男性が35.2%，女性が34.7%と特に高い参加意向を持つ一方、男女とも40代は参加意向が低い。

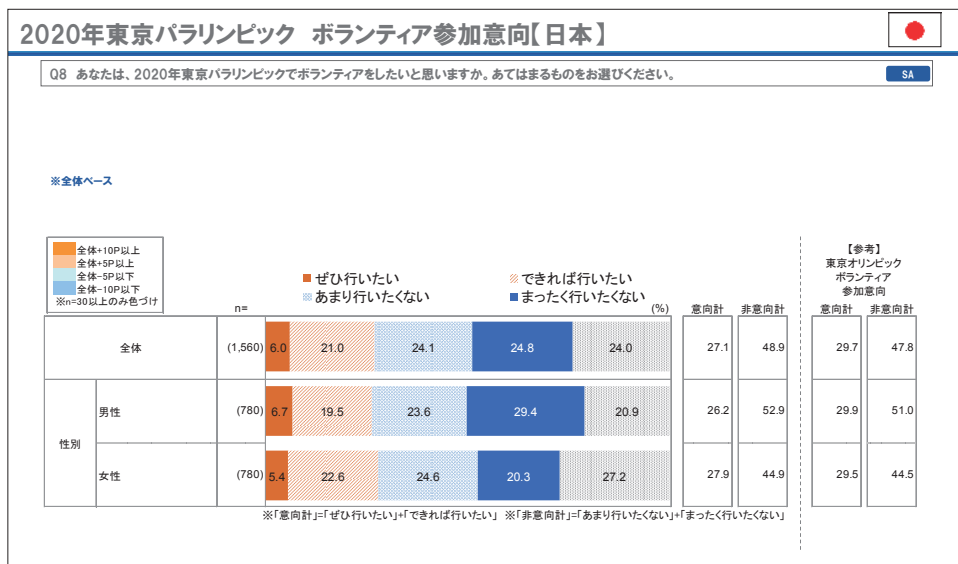


図11

オリンピックでのボランティア参加意向との重なりをみると、オリンピックとパラリンピックの両方でボランティアを行いたい人が24.7%と全体の4分の1を占める。いずれかだという人は、パラリンピックで2.3%、オリンピックで4.9%と少数にとどまった（詳細データ省略）。

(3) 期待すること

最後に、「2020年東京パラリンピックの開催で期待すること」として、4つの選択肢を示し、複数回答可で回答を求めた。その結果、図12のとおり、51.1%と過半数の人が、東京パラリンピックを機に「障害のある人のスポーツ機会がふえ環境が充実すること」を期待していることが判明した。「公共施設等のバリアフリー化進展」への期待も48.9%と高い。これに、「障害者福祉に関する理解促進」が次ぎ、「日本のメダル獲得数増加」への期待は4つの選択肢のうち最少の38.5%であった。相対的にメダル獲得への期待が高い20代の回答でもやはり、「障害者のスポーツ環境の充実」と「公共施設等のバリアフリー化」が「日本のメダル獲得数増加」を上回る。「障害者のスポーツ環境の充実」と「公共施設等のバリアフリー化」を期待する女性は、男性よりそれぞれ1割前後多いこと、さらに、バリアフリー化への期待は年代を追って高まることなども示された。

他方、「期待することは特にない」という回答が2割を超え、関心の薄い層が一定程度存在するが、これには回答者の趣味嗜好との極めて高い相関関係がみられる。外に出

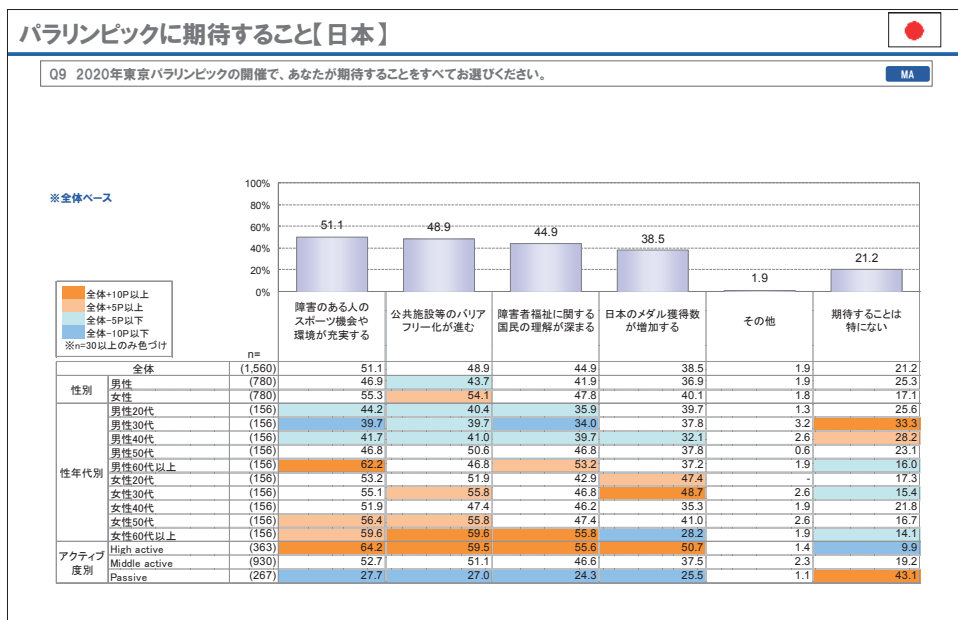


図12

て活動する気持ちの強い人ほど、パラリンピックとそれがもたらす社会変革に強い期待を持つことが、「アクティブ度別」の回答状況から明らかにされている（詳細データ省略）。

総括

今回の調査で、国内で「パラリンピック」の名称は十分に浸透しているものの、内容の正しい理解が少なく、その間のギャップが極めて大きいことが明らかにされた。

名称しか知らない人のボランティア参加意向度は低く、内容を理解している層は高い参加意向を示すこと、また、障害者スポーツの観戦経験者の20%以上が「是非」、「できれば」を加える56.2%と全体の2倍以上の高い比率でボランティア参加を意向することなどから、内容を理解し、接触経験を持つことが、より深い関心と関与への意欲に直結することが、調査結果から読み取られる。

これらより、パラリンピックの内容や実態を広く社会に知らしめるための啓発活動の重要性があらためて確認される。次世代を担う小中学生に対しては、体育の授業に障害者スポーツの体験を取り入れるなど接触機会の創出、一般に対しては、ルールをわかりやすく説明し、パラリンピック競技の面白さを簡潔に伝える素材の開発・普及などが、具体策の一例として考えられる。2020年に向け、官民の関係組織が様々な施策を講じていくことになろうが、それらが全体として、より確実に大きな効果を上げるための仕組みづくりも求められる。

国際比較を通じて、日本では他国以上に、テレビの報道番組等でパラリンピックに触れる機会が多い一方で、中継で観戦される競技に大きな偏りがあること、さらに、インターネットの視聴が相対的に少ないことが示された。社会の関心喚起にメディアが果たす役割は極めて大きいことは言をまたない。インターネットでの競技中継を含め、パラリンピック競技の報道機会が増し、障害者スポーツの面白さと障害者アスリートたちの魅力に、より高い関心が寄せられるようになることを期待したい。他方、他国との比較から浮き彫りにされるように、障害者スポーツ観戦機会の拡大も、パラリンピックに対する関心喚起に向けた重要課題の一つとして数えられる。

若い世代で3分の1、全体でも4分の1と多数にのぼる人々が、ボランティアとしてパラリンピックに参加の意向を持つこと、そのほとんどがオリンピックとパラリンピックの両方でボランティア参加を希望することは、人々の関心の高さを裏付けるものとし

て喜ばしく感じられる。しかし、パラリンピック競技の支援には、健常者スポーツの場合と異なる知識とスキルが求められる。ボランティア参加の意欲を持つ人々にそうした知識・スキルを習得する機会が広く提供され、彼らの高い意欲が活かされて、質の高いボランティア活動がパラリンピックを支える道筋の整備が強く望まれる。

最後に、今回の調査では、2020年東京パラリンピック大会を契機として、障害者の社会参加が進み、バリアフリー化が進展することにより、大会での日本のメダル獲得数増加を上回る強い期待が寄せられていることが明らかになった。社会の一層の高齢化を前に、障害者を含めた共生社会の実現により近づくための社会変革の好機として2020年東京パラリンピック大会に向かうことができるよう、施策の検討が急がれる。

本文調査報告の内容を利用・転載する場合は、日本財団パラリンピック研究会の調査によるものであることを明記してください。

調査票

スポーツに関する調査

下記アンケートにご協力お願いします。

当アンケートの回答者の皆様へお願い

マクロミルモニタの皆様はモニタ規約にて「調査についての守秘義務」の徹底をお願いします。

当アンケートの内容および当アンケートで知り得た情報については、決して第三者に口外しないよう（掲示板やホームページへの書き込みを含む）、ご協力をお願いします。

● ①必須入力(全項目)

Q1 あなたは、以下のそれぞれの言葉を知っていますか。
【 必須入力 】

	1 内容を知っている	2 この名称を見たり聞いたりしたことがある程度	3 この名称を知らない
1. パラリンピック →	☐	☐	☐
2. スペシャルオリンピックス →	☐	☐	☐
3. デフリンピック →	☐	☐	☐

- セレクト条件：【Q1項目1】で1,2と答えた方
- ①必須入力
- 排他選択肢：8. わからない

Q2 あなたは、パラリンピックにどんな障害者が参加するか知っていますか。
参加していると思う障害について、あてはまるものをすべてお選びください。

【必須入力】

- ☐ 1. 肢体不自由(手足の不自由な方、車いすの方など)
- ☐ 2. 視覚障害
- ☐ 3. 聴覚障害
- ☐ 4. 内臓障害
- ☐ 5. 知的障害
- ☐ 6. 発達障害
- ☐ 7. 精神障害

- ☐ 8. わからない

- セレクト条件：【Q1項目1】で1,2と答えた方
- ①必須入力
- 排他選択肢：7. パラリンピックに関するテレビ番組や報道記事等を見たことがない

Q3 あなたはこれまで、パラリンピックについてのテレビ番組や報道記事等を見たことがありますか。
以下の中であてはまるものをすべてお選びください。

【必須入力】

- ☐ 1. テレビ:大会の中継番組
- ☐ 2. テレビ:ニュース番組や選手・競技を紹介した特集番組
- ☐ 3. インターネット動画:大会の中継
- ☐ 4. インターネット動画:ニュース番組や選手・競技を紹介した特集番組
- ☐ 5. 新聞・雑誌:大会結果や選手・競技を紹介した特集記事
- ☐ 6. インターネット(動画を除く):大会結果や選手・競技を紹介した特集記事

- ☐ 7. パラリンピックに関するテレビ番組や報道記事等を見たことがない

- セレクト条件：【Q3】で1,3と答えた方
- ①必須入力
- ②26_FA: 必須入力

Q4 以下のパラリンピックの競技種目のうち、
テレビもしくはインターネット動画で観戦したことのある競技をすべてお選びください。
※競技場での生観戦を含めずにお答えください。

【必須入力】

<夏季大会>

- ☐ 1. アーチェリー
- ☐ 2. ウィルチェアラグビー
- ☐ 3. 車いすフェンシング
- ☐ 4. 車いすテニス
- ☐ 5. 車椅子バスケットボール
- ☐ 6. ゴールボール
- ☐ 7. 卓球
- ☐ 8. 射撃
- ☐ 9. 馬術
- ☐ 10. パワーリフティング
- ☐ 11. ボート
- ☐ 12. 視覚障がい者5人制サッカー
- ☐ 13. 脳性麻痺者7人制サッカー
- ☐ 14. 自転車
- ☐ 15. シットイングバレーボール
- ☐ 16. 柔道
- ☐ 17. 水泳
- ☐ 18. セーリング
- ☐ 19. ボッチャ
- ☐ 20. 陸上競技

<冬季大会>

- ☐ 21. アイススレッジホッケー
- ☐ 22. アルペンスキー
- ☐ 23. 車いすカーリング
- ☐ 24. クロスカントリースキー
- ☐ 25. バイアスロン

<その他>

- ☐ 26. その他

- ①必須入力

Q5 あなたは、これまでにパラリンピック以外の障害者スポーツを直接観戦したことがありますか。
【必須入力】

1
ある

☐

2
ない

☐

- セレクト条件：【Q5】で1と答えた方
- ①必須にする(FA欄【1】個以上必須入力)
- ①I_FA: 必須入力

パラリンピック以外の障害者スポーツを直接観戦した方に伺います。

- Q6** 直接観戦したパラリンピック以外の障害者スポーツの大会や種目名について主なものを最大3つまでお書きください。
【1個以上必須】

	(必須入力)

- ①必須入力(全項目)
- 排他選択肢: 3. 観戦したくない

- Q7** あなたは、2020年東京オリンピック・パラリンピックを観戦したいですか。
それぞれについてあてはまるものをすべてお選びください。
【必須入力】

	1 会場 で 直接 観 戦 し た い	2 テ レ ビ や イ ン タ ー ネ ッ ト の 動 画 中 継 で 観 戦 し た い	3 観 戦 し た く な い
1. 東京パラリンピック →	☐	☐	☐
2. 東京オリンピック →	☐	☐	☐

①必須入力(全項目)

Q8 あなたは、2020年東京オリンピック・パラリンピックでボランティアをしたいと思いますか。それぞれあてはまるものをお選びください。
【必須入力】

	1 ぜひ行いたい	2 できれば行いたい	3 あまり行いたくない	4 まったく行いたくない	5 わからない
1. 東京パラリンピック	☐	☐	☐	☐	☐
2. 東京オリンピック	☐	☐	☐	☐	☐

①必須入力
⑥F_A: 必須入力
排他選択肢: 6. 期待することは特にない

Q9 2020年東京パラリンピックの開催で、あなたが期待することをすべてお選びください。
【必須入力】

☐ 1. 日本のメダル獲得数が増加する

☐ 2. 障害のある人のスポーツ機会や環境が充実する

☐ 3. 公共施設等のバリアフリー化が進む

☐ 4. 障害者福祉に関する国民の理解が深まる

☐ 5. その他

☐ 6. 期待することは特にない

①必須入力(全項目)

Q10 以下のそれぞれについて、あなたのお気持ちに最も近いものをお選びください。
【必須入力】

	1 とてもあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない
1. 運動・スポーツで体を動かすのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
2. スポーツを生で(競技場などで)観戦するのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
3. 公営ギャンブル(競馬・オートレース・競輪・オートレース)を生で(競技場などで)観戦するのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
4. 映画館で映画を見るのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
5. 美術館・博物館に行くのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
6. 動物園・植物園・水族館に行くのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
7. 劇場で演劇を見るのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
8. ライブやコンサートに行くのが好き	☐	☐	☐	☐	☐
9. 遊園地・テーマパークが好き	☐	☐	☐	☐	☐
10. 雪山のハイキングや登山が好き	☐	☐	☐	☐	☐
11. 国内旅行が好き	☐	☐	☐	☐	☐
12. 海外旅行が好き	☐	☐	☐	☐	☐
13. ドライブやツーリングが好き	☐	☐	☐	☐	☐
14. 釣り・キャンプなどアウトドアの活動が好き	☐	☐	☐	☐	☐

アンケートは以上で終わります。ご協力ありがとうございました。
回答もれがないか確認し、よろしければ「送信」ボタンをクリックしてください。

送信

The General Public's Awareness and Interest in the Paralympics in Japan and in Some Selected Countries

Hiromi Sato

The Nippon Foundation Paralympic Research Group, with the cooperation of Sasakawa Sports Foundation, carried out opinion surveys from September to October 2014 in a total of six countries including Japan, Australia, United States, South Korea, Germany, and France, in order to grasp what degree of awareness and interest in the Paralympics there is in society. The surveys covered 4,205 people in total; 1,560 in Japan and about 500 respectively in the five overseas countries.

1. Awareness and interest in the Paralympics

The term "Paralympics" is prevalent in Japan (98.2% of respondents recognized it), which is a leading level worldwide. However, a correct understanding of what the Paralympics entails is yet to catch on.

In other countries, the ratio of respondents with a correct understanding of what sorts of disabilities Paralympic participants have was low across the board as well. Trends that were detected included a large number of respondents in the United States who mistakenly believed the Paralympics do not include participation by the visually impaired, and a large number of respondents in France, South Korea, and Germany who, like Japanese respondents, had the misconception that the Paralympics include participation by the hearing impaired.

In Japan the ratio of respondents who had come into contact with reports on the Paralympics through the media was 90.1%, a high ratio compared to other countries. On the other hand, the number who said they had viewed videos that were broadcast etc. online was only around half the six-country average.

In South Korea, Australia, and the United States, many respondents said they had come into contact with Paralympic reports online. Of the six countries, South Korea

had large number of respondents who obtained information through online broadcasting of the games and articles other than newspapers and videos. In the United States, Germany, and Australia, many respondents had no experience of coming into contact with the Paralympics in any media whatsoever, but notably, among younger respondents, the degree of contact through the Internet and newspapers was comparatively high.

In all countries, substantial biases were evident when it came to the broadcasted Paralympic sports events that respondents watched. On average, across the six countries surveyed, the events that respondents revealed watching the most were wheelchair basketball, athletics, swimming, wheelchair tennis, and alpine skiing, in that order.

2. Expectations for the Tokyo 2020 Paralympic Games (survey covered Japan only)

61.3% of respondents said they hope to watch events broadcast by the media, a figure that exceeds the ratio hoping to watch broadcasted Olympic Games. The ratio of respondents saying they hope to watch events directly, at the venues, was around half the ratio who gave a similar response regarding the Olympic Games.

27.1% of respondents said they hope to participate in the Paralympics as volunteers, and the majority said they want to volunteer at both the Olympic and the Paralympic Games.

Among younger respondents, the desire to take part was strong among men in particular. On the other hand, among respondents in their 40s, the desire to participate was low for both men and women.

51.1% of respondents said they anticipate that holding the Paralympic Games in Tokyo will result in “more sports opportunities and an enhanced environment for people with disabilities.” The ratio who said they anticipate “progress with making public facilities and other venues barrier-free” was also high, at 48.9%. These responses were followed by the expectation the Paralympics will lead to “the promotion of understanding regarding welfare for the disabled,” and of the four possible answers, the expectation that “the number of medals won by Japan will

increase" scored the lowest, at 38.5% (multiple answers were possible).

Even among respondents in their 20s, who revealed a relatively high expectation toward medal-winning, the ratio who said they anticipate "an enhanced sporting environment for people with disabilities" and "a move to make public facilities and other venues barrier-free" exceeded the ratio saying they expect "the number of medals Japan wins to increase."

If utilizing or reprinting the contents of this survey report, please clearly state that the surveys were carried out by the Nippon Foundation Paralympic Research Group.

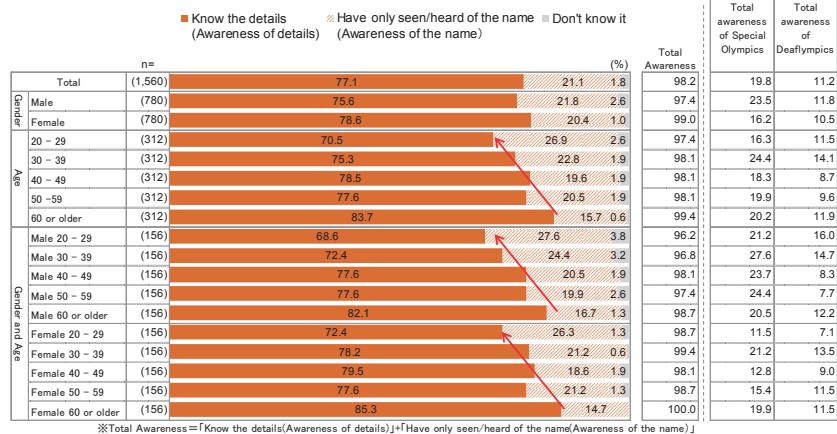
Awareness of the Paralympics<Japan>



Q1 Do you know about the Paralympics?

SA

※Respondents: all

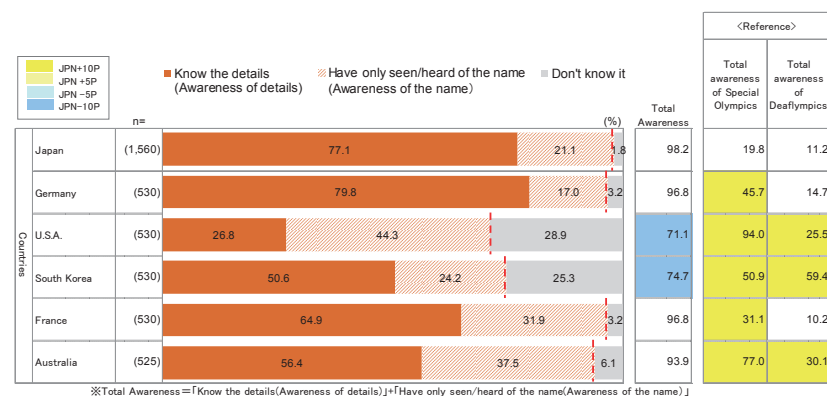


Awareness of the Paralympics <Comparison among Countries>

Q1 Do you know about the Paralympics?

SA

※Respondents: all



The General Public's Awareness and Interest in the Paralympics in Japan and in Some Selected Countries

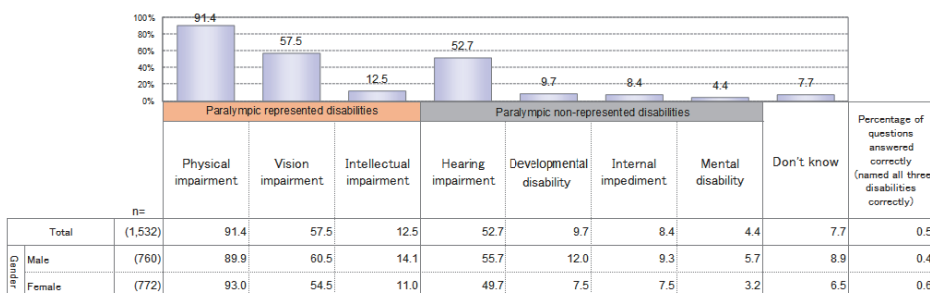
Awareness of Paralympic Represented Disabilities <Japan>



Q2 Do you know what sorts of disabilities Paralympics participants have? Please select all those you suppose.

MA

※ Respondents: "Know the details" or "Have seen/heard of it."

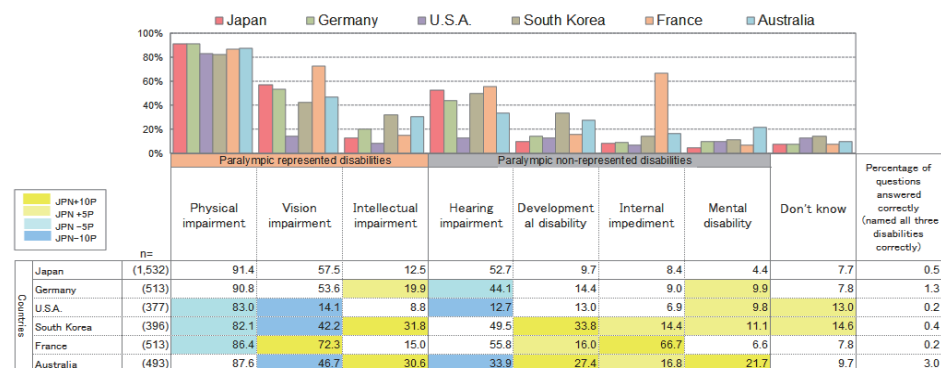


Awareness of Paralympic Represented Disabilities <Comparison among Countries>

Q2 Do you know what sorts of disabilities Paralympics participants have? Please select all those you suppose.

MA

※ Respondents: "Know the details" or "Have seen/heard of it."



* Since there is no French word for "internal impediment," "Handicaps physiques autres que tétra et paraplégiques (internal impediments other than physical handicaps)" was used in the survey.

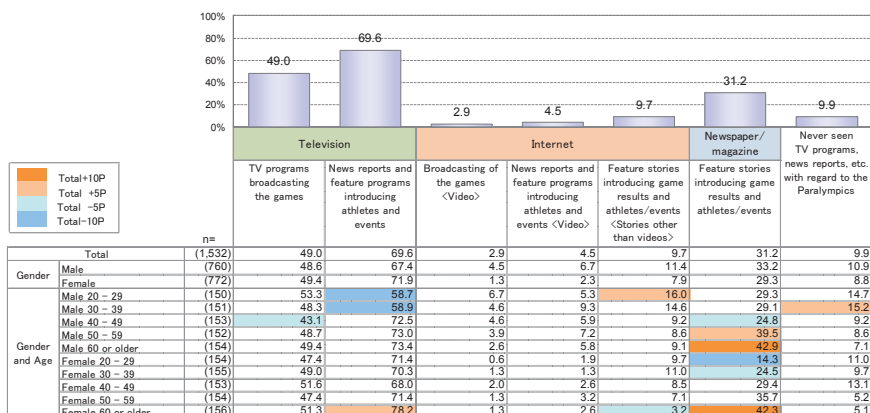
Contact with Media about the Paralympics <Japan>



Q3 Have you ever seen broadcast programs or news reports about the Paralympics through any sorts of media?
Please select all that apply from the following.

MA

※ Respondents: "Know the details" or "Have seen/heard of it."

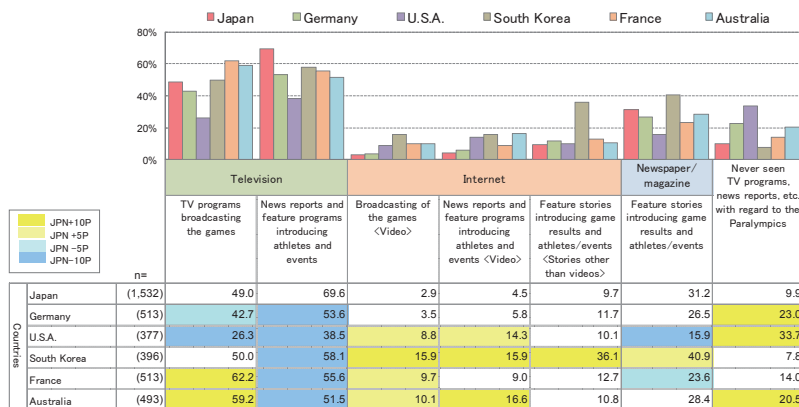


Contact with Media about the Paralympics <Comparison among Countries>

Q3 Have you ever seen broadcast programs or news reports about the Paralympics through any sorts of media?
Please select all that apply from the following.

MA

※ Respondents: "Know the details" or "Have seen/heard of it."



The General Public's Awareness and Interest in the Paralympics in Japan and in Some Selected Countries

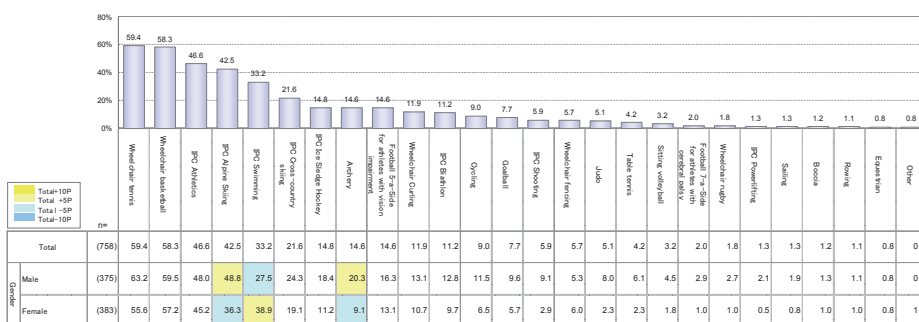
Experience of watching Paralympic Games <Japan>



Q4 Please select all the games that you have watched on TV or on the Internet from among the following Paralympic sports.
* Exclude games you watched in stadiums.

MA

※ Respondents: those who have watched Paralympic games on TV or on the Internet.

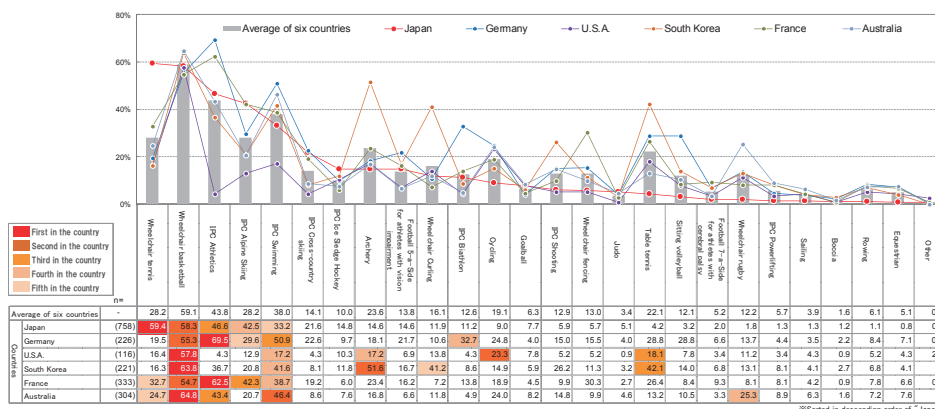


Experience of watching Paralympic Games <Comparison among Countries>

Q4 Please select all the games that you have watched on TV or on the Internet from among the following Paralympic sports.
* Exclude games you watched in stadiums.

MA

※ Respondents: those who have watched Paralympic games on TV or on the Internet.

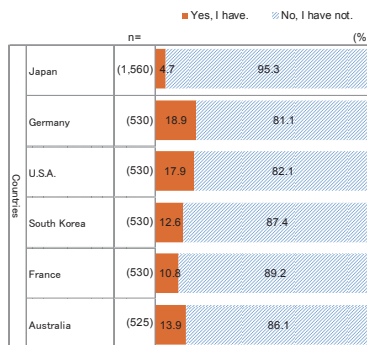


※Sorted in descending order of Japan

Experience of watching sports for the disabled other than the Paralympics in stadiums <Comparison among Countries>

Q5 Have you watched any sporting events for people with disabilities other than the Paralympics in stadiums? SA

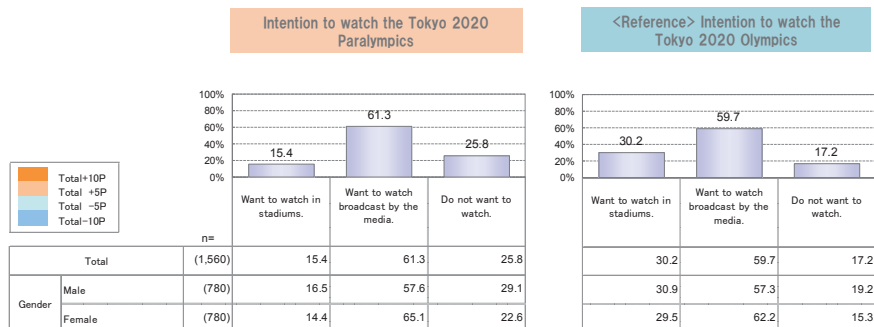
※ Respondents: all



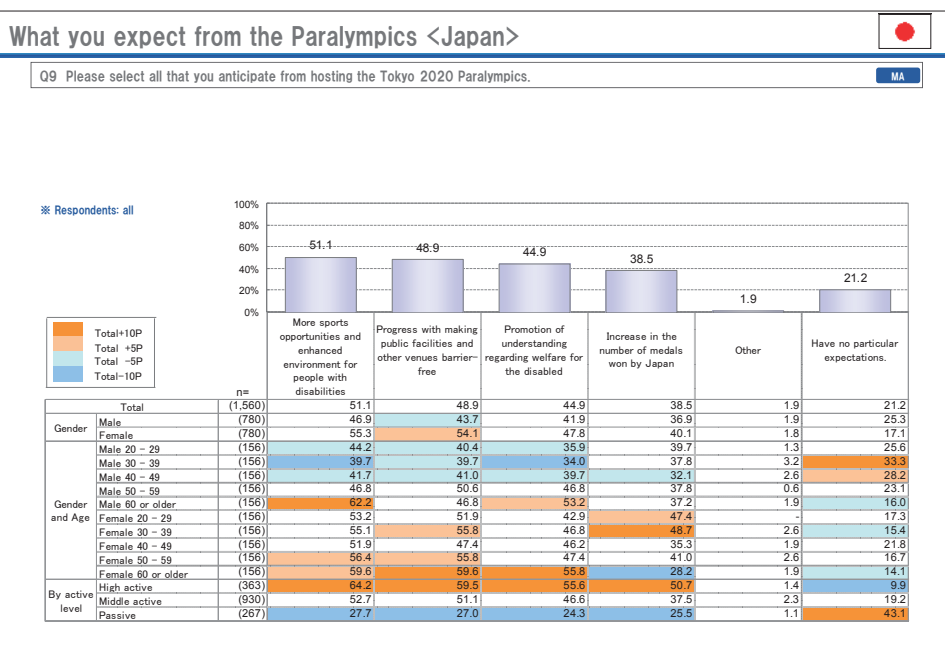
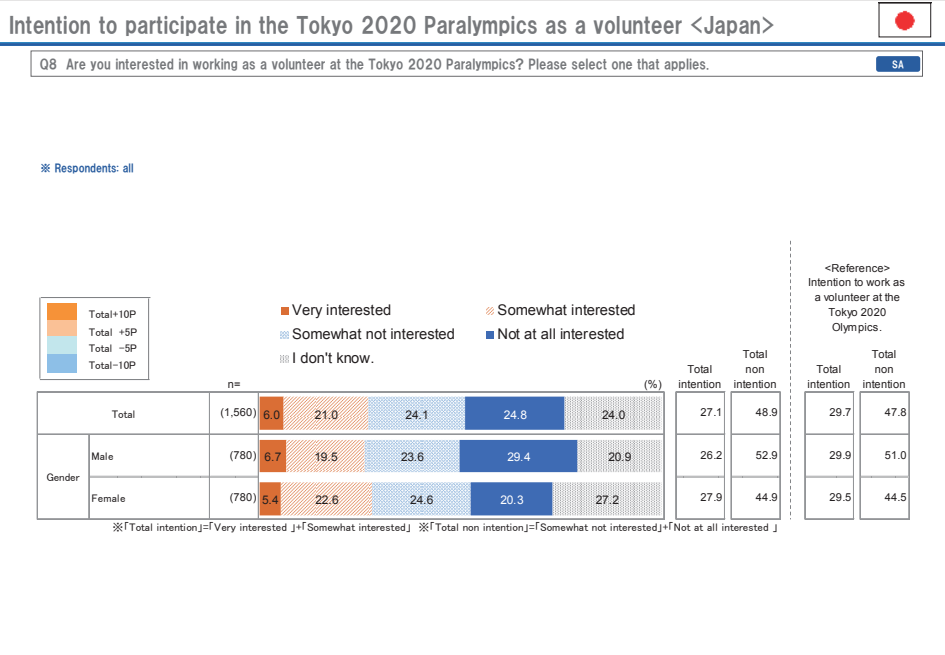
Intention to watch the Tokyo 2020 Paralympics <Japan>

Q7 Do you want to watch the Tokyo 2020 Paralympics? Please select all that apply. MA

※ Respondents: all



The General Public's Awareness and Interest in the Paralympics in Japan and in Some Selected Countries



パラリンピックにおける 日本および各国の選手数と成績の変化

番定賢治

はじめに

2013年に2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定して以来、2020年のパラリンピックのレガシーとして、どのようなものが期待されているだろうか。本号掲載の佐藤論文における調査によれば、2020年の東京パラリンピック開催を受けて、パラリンピック開催を契機とした障害者福祉の向上が最も高い期待を集めている。しかし、我々が念頭に置かなければならないのは、パラリンピックが第一にスポーツイベントだということである。佐藤論文によれば、日本選手団の成績向上も大きな目標として根強い期待を集めており、また、2020年の東京パラリンピック開催決定を受けて、各種障害者スポーツ競技団体が2020年の出場に向けて若いアスリートの育成強化を目指しているのも事実である。

このように日本代表選手の活躍が2020年に向けた大きな目標の一つであるという認識が広く共有されている一方で、日本の障害者スポーツ選手のパラリンピックへの参加状況やパラリンピック日本代表選手の成績がパラリンピック参加国各国や世界全体の水準から見てどれだけの水準にあるのかということは、あまり広く知られていない。より多くの日本選手の参加や成績向上という目標が一見自明に思えるからこそ、その目標を具体化し、目標達成までの戦略を形にするためには、日本選手の参加状況や成績の現在地点を認識する必要がある。そのためには、これまで日本選手団や各国の選手団がどれだけ多くパラリンピックに参加し、どれだけ多くのメダルを獲得してきたかを知る必要があるだろう。

このような問題を考えるにあたってまず、パラリンピックにおける日本や各国の選手数とともに、パラリンピックに参加する選手全体の数を検討しなければならない。かつて1964年に東京パラリンピックが開かれた際、それは東京オリンピックに続く大会として宣伝されたものの、その実際の規模は東京オリンピックに比べて非常に小さいものだった。しかし、それから50年が経った現在、パラリンピックはオリンピックに肩を並

べる大規模なイベントにまで成長した。オリンピックの開会式・閉会式とパラリンピックの開会式・閉会式が同じ会場で開かれることが慣例化したという点だけを見ても、パラリンピックがオリンピックに匹敵するイベントとして認識されるようになったことは理解できるだろう。このようにパラリンピックがスポーツイベントとして急速な発展を達成したことを踏まえ、それが選手数という形でどう反映されたかを確認した上でこそ、日本を始めとする世界各国の参加選手数を見ることで、パラリンピックにおける日本の位置づけを知ることができると考えられる。

また、2020年の東京パラリンピックとそれに向けた日本の障害者スポーツの取組みを考える上での問題の一つとして、パラリンピックにおける女性選手の参加の拡大が挙げられる。確かに、2020年東京大会の招致に佐藤真海がプレゼンテーターとして貢献したことなどにより、女性のパラリンピック選手が活躍していることは日本においても広く認知されるようになった。しかしパラリンピックでは、選手全体における女性選手の割合が未だに低い値にとどまっている（詳細後述）。2020年の東京パラリンピックをより多くの人々にとって親しみやすいものにしていくためにも、日本選手団における女性の参加状況の現状を把握し、それが世界各国の水準と比べてどの程度の地位にあるのかを知る必要があるだろう。

更にその上で検証しなければならないものとして、パラリンピックにおける日本選手団の成績の水準が考えられる。パラリンピックに多くの日本代表選手が参加することは、日本代表選手が多くのメダルを獲得することに必ずしも結びつくわけではない。検討されなければならないのは、日本や世界各国の選手団がその規模に比してどれだけのメダルを獲得しているかという点である。

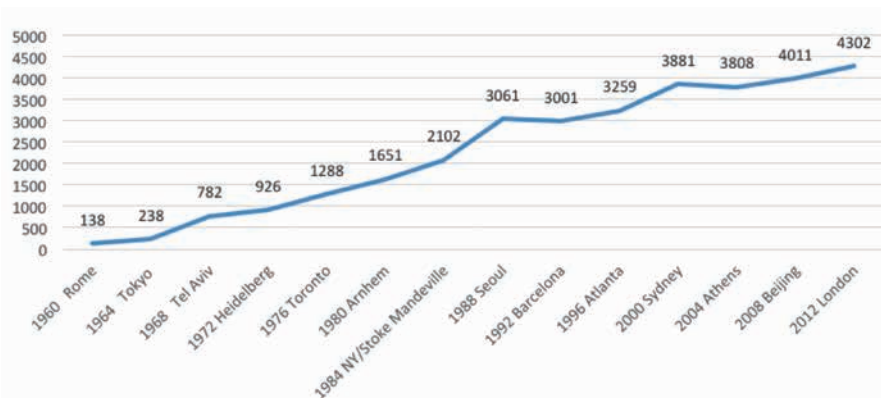
以上の問題を踏まえ、本論文では、「パラリンピックにおける全体、日本および各国の選手数の変化」「パラリンピックにおける全体、日本および各国の女性の参加状況の変化」「パラリンピックにおける日本および各国の成績水準の変化」という三つの論点について、国際パラリンピック委員会（IPC）発表データにおける各大会における選手数とメダル数の値をもとに検討を行うものである。資料元として、IPC ウェブサイトにおける1960年ローマ大会から2012年ロンドン大会までの夏季大会の成績結果、1976年エーンシェルドスピーク大会から2014年ソチ大会までの冬季大会の成績結果のデータを参照した¹⁾。これを元に上記三点の論点について検討した上で、本論文終章では、パラリンピック日本選手団の現状とこれからの展望について若干の考察を付す。

1. パラリンピックの選手数の変化

まず、パラリンピックにおける夏季・冬季それぞれの全体の選手数を見てみたい。以下の graph 1は、夏季パラリンピックにおける全体の選手数、graph 2は、冬季パラリンピックにおける全体の選手数を表している。

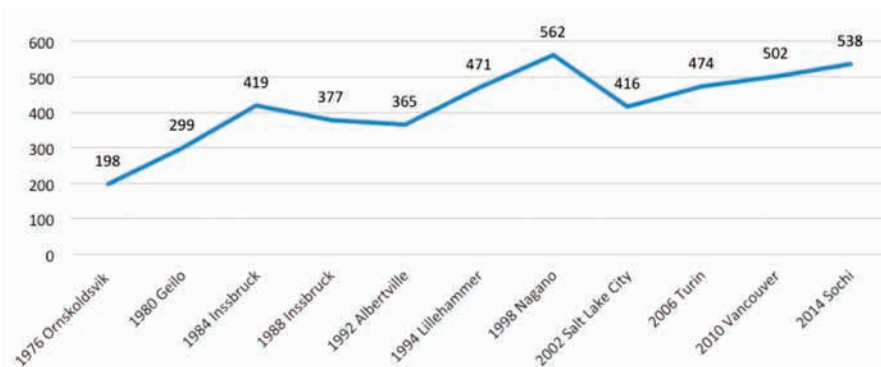
まず、夏季パラリンピック全体の選手数は、1960年ローマ大会から2012年ロンドン大会まで、一貫して拡大を続けていることがわかる。例えば、1960年ローマ大会の総選手数が138名だったのに対し、2012年ロンドン大会の総選手数は4302名となっており、現在に至るまでにその規模は約30倍にまで膨れ上がったことがわかる。また、1988年までは高い伸び率で拡大を続けていたが、1988年ソウル大会から選手数の増加が横ばいとなる大会が登場することで規模拡大のペースがやや緩くなっていることも伺える。選手数

graph 1. number of total athletes in the summer Paralympic games



reference: <http://www.paralympic.org/results/historical>

graph 2. number of total athletes in the winter Paralympic games

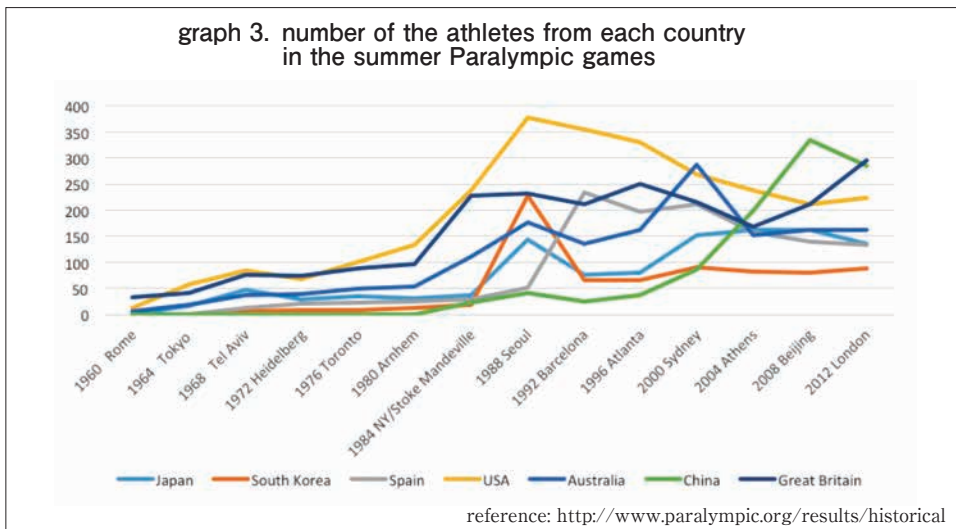


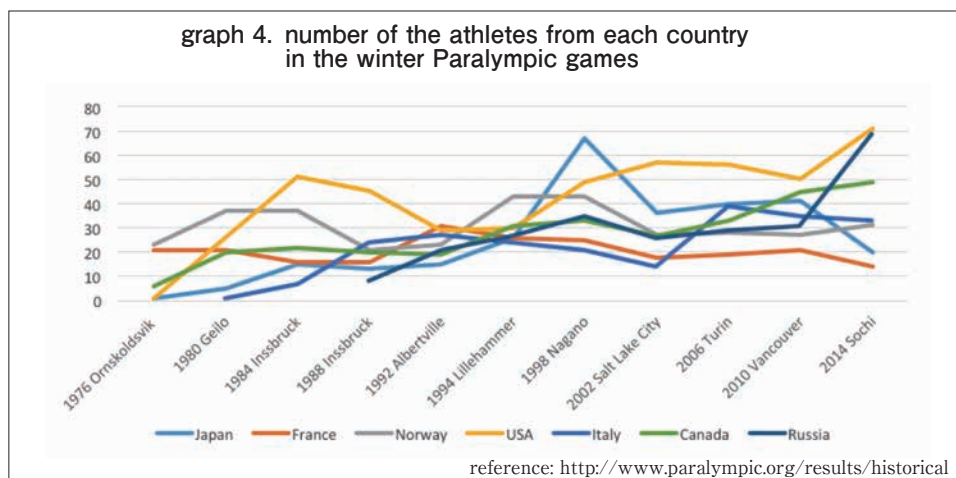
reference: <http://www.paralympic.org/results/historical>

という点から夏季パラリンピックの規模を考えれば、ソウル大会までを発展期、それ以降を成熟期として評価することが可能であろう。

次に、冬季パラリンピック全体の選手数を見ると、これは1998年の長野大会で計562名という最大値となって以来、ほぼ400～500名前後で推移していることがわかる。夏季パラリンピックにおいて2008年北京大会以降4000人以上の選手が参加していることを踏まえれば、冬季パラリンピックが未だかなりの小規模にとどまっていることがわかる。長期的には増加傾向にある夏季パラリンピックの選手数に比べ、冬季パラリンピックの選手数は横ばい傾向にあると判断できるだろう。

次に、各大会における日本代表選手の数の変化を、開催経験国の各大会における代表選手の数の変化とともに見ると、以下の様な傾向が明らかになる。まず、graph 3において夏季パラリンピック開催国（韓国、スペイン、アメリカ、オーストラリア、中国、イギリス）の各大会における選手数の変化を見ると、開催国となる前にすでに大きな選手団を形成しており選手数拡大のピークを迎えている国が一国ある（アメリカ）のを除けば、開催国の多くは開催国となる大会で選手数拡大のピークを迎えていることがわかる（韓国、スペイン、オーストラリア、中国、イギリス）。また、開催国として参加した大会で急激に選手数を増加させて以来再び開催国となる前の水準の選手数に戻ってしまった国（韓国、オーストラリア）がある一方で、開催国として参加した大会の後の大会でも開催国となる前より多くの選手数を維持している国（スペイン、中国）もある。ここから、一定の留保は必要だが、自国が開催国となることがきっかけでパラリンピックに参加する選手数が拡大する可能性は十分にあると考えることが出来る。日本に目を向ければ、夏季パラリンピックにおける日本選手団の数は1988年のソウル大会で一度





ピークを迎え、その後ソウル大会前の水準に低下するも、再び2000年のシドニー大会でピークを迎え、それ以降横ばい傾向となっている。

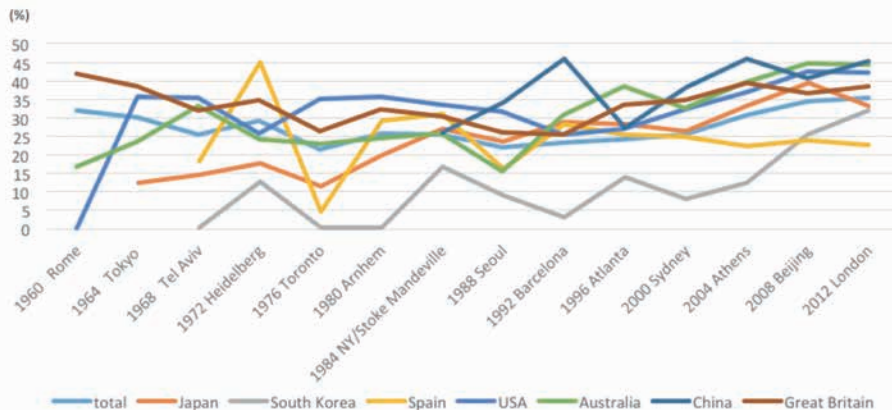
次に、graph 4において冬季パラリンピック開催国（フランス、ノルウェー、日本、アメリカ、イタリア、カナダ、ロシア）の各大会における選手数の変化を見ると、開催国になることで選手団の規模が急速に拡大する例（ノルウェー、日本、イタリア、ロシア）がある一方で、多くの開催国は開催国となる大会に至るまでに、比較的なだらかに選手数を増加させていることがわかる（フランス、アメリカ、カナダ）。冬季パラリンピックでも開催国となることが選手団の規模の拡大につながる傾向はあるものの、それは夏季パラリンピックの場合と比べてやや抑制的であると言えるだろう。

2. パラリンピックにおける女性の参加状況

この章では、パラリンピックにおける女性選手の参加状況を確認し、その上で、日本代表選手における女性の参加状況の水準を検討したい。次の graph 5と graph 6は、パラリンピックにおける日本を含む各国と全体の女性選手の割合を大会ごとに表したものである。

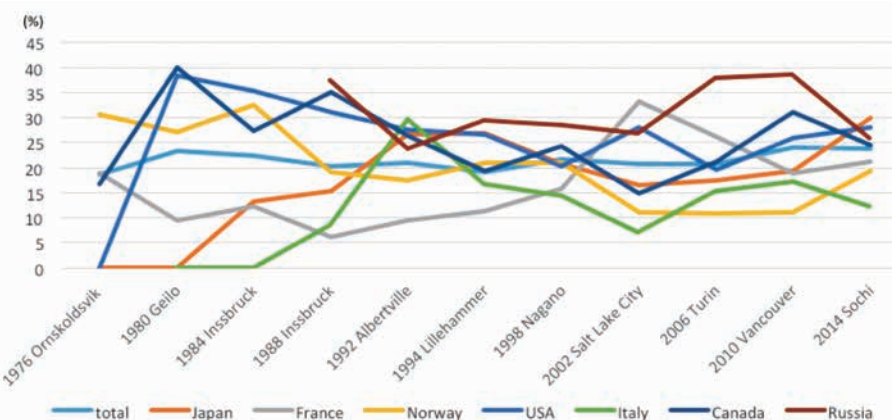
まず夏季パラリンピックについて見ていくと、大会全体における女性選手の割合は、最新の2012年ロンドン大会の段階でも35%にとどまっている。また、この女性選手の割合は1960年ローマ大会の時点で既に32%に達しており、その後低下した上で2000年シドニー大会から漸増したものである。つまり、現代に至るまでパラリンピック全体の規模が大きくなり全体の選手数が増加し続けているにもかかわらず、パラリンピックにおける女性選手の参加状況は低水準にとどまっているといえる。日本代表選手における

graph 5. percentage of female athletes among the athletes from each country in the summer Paralympic games



reference: <http://www.paralympic.org/results/historical>

graph 6. percentage of female athletes among the athletes from each country in the winter Paralympic games



reference: <http://www.paralympic.org/results/historical>

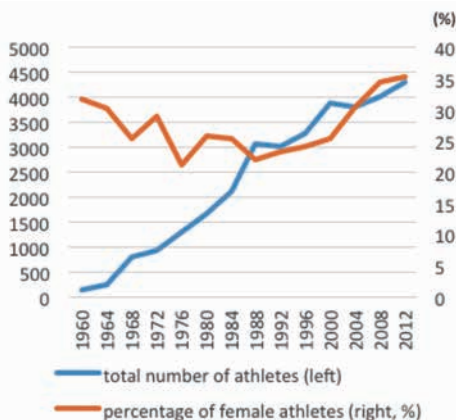
女性選手の割合に目を向けると、2012年ロンドン大会ではやや低下しているものの、基本的には1984年ニューヨーク・ストックマンデビル大会以降、全体における割合よりは高い水準を維持しているといえる。しかし、1988年以降の夏季パラリンピック開催経験国それぞれについて女性選手の比率を見ると、大会全体の比率を下回っているのは韓国とスペインのみで、他4カ国は大会全体の比率を上回っている。大規模な選手団を有している各国と比べれば、日本代表選手における女性選手の比率は標準的だと言えるだろう。

次に冬季パラリンピックについて見ていくと、大会全体における女性選手の割合は、最新の2014年ソチ大会の段階でも24%にとどまっている。重要なのは、この冬季大会全体における女性選手の割合は、1976年の第1回冬季大会（エーンシェルドスピーク大

会)の時点から一貫して25%以下を維持し続けているということである。冬季大会の場合、夏季大会のように一貫して大規模化しているわけではないが、女子選手の割合が夏季大会の水準より一貫して低いという点は、注目すべきである。日本代表選手における女性選手の割合に目を向けると、1992年アルベールビル大会、1994年リレハンメル大会を除いて、大会全体の水準よりさらに低い値にとどまっていることがわかる。2014年ソチ大会では大会全体の水準より高い値となっているが、この大会ではそれまで男子のみ出場していたアイススレッジホッケー日本代表チームの出場がなかったため、その影響によるものだと考えられる。夏季大会に比べ、冬季大会の日本代表選手における女性選手の割合は、世界的水準に比べ低いものにとどまっていると言えるだろう。

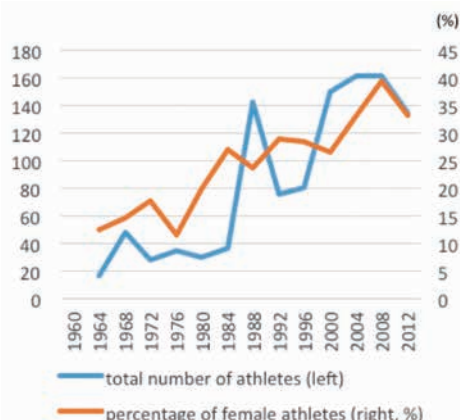
先に、現代に至るまでパラリンピック全体の規模が大きくなり全体の選手数が増加し続けているにもかかわらず、パラリンピックにおける女性選手の参加状況は低水準にとどまっていると述べた。夏季パラリンピックにおける両者の比較をよりはっきりとしたグラフにしたものが、graph 7-1である。これを見れば、夏季パラリンピック全体の規模とそこでの女性の参加状況は比例していないことがわかる。一方で、日本代表選手について全体選手数と女性選手の数とをグラフで比較したものが、graph 7-2である。これを見ると、日本に関しては、選手団の規模が増大するに従って女性の参加比率もゆるやかに上昇していることがわかる。夏季に関しては、たとえ古くからの参加国において女性選手の割合が上昇しても、女性選手の比率が少ない新規参加国の参加がそれを相殺するため、全体として女性選手の参加状況が低い水準にとどまっているということが予想

graph 7-1. number of athletes and percentage of female athletes in the summer Paralympic games - general



reference: <http://www.paralympic.org/results/historical>

graph 7-2. number of athletes and percentage of female athletes in the summer Paralympic games - Japan



reference: <http://www.paralympic.org/results/historical>

される。

なお、冬季パラリンピックについては、先に示した通り、元来国別に参加する選手数が夏季パラリンピックと比較して少なく、男女それぞれのチーム競技のチームが出場するか否かによる差異が大きく影響する以上、選手数の増減と女性選手の割合の単純な比較が難しいため、ここでは比較を避ける。

3. パラリンピックにおける各国の成績水準

最後にこの章では、パラリンピックにおける日本代表選手が各国の選手団と比べてどの程度の水準の成績を残しているのかを検討したい。一国の選手団全体の成績の水準を比較する場合、メダル獲得数の順位の変遷を比較するなど、様々な方法が考えられる。しかし、より厳密な比較のためには、成績水準を数値化した上で各国の比較を行うことが重要である。そのため今回は、各国について、選手数に対してどれだけ多くのメダル（金、銀、銅）を獲得したのかを基準にして比較を行った。しかし、過去の大会から競技数やクラシフィケーションの増加により授与されるメダルの数は増加しているため、大会ごとに選手の総数に対する全体のメダル数の割合（メダルの獲得しやすさ）が異なるという問題がある。そこで本論文では、以下のように成績指数を定義する。

$$\text{成績指数} = \frac{\text{各国のメダル数}}{\text{各国の総選手数}} \times \frac{\text{各大会の総選手数}}{\text{各大会のメダル数}}$$

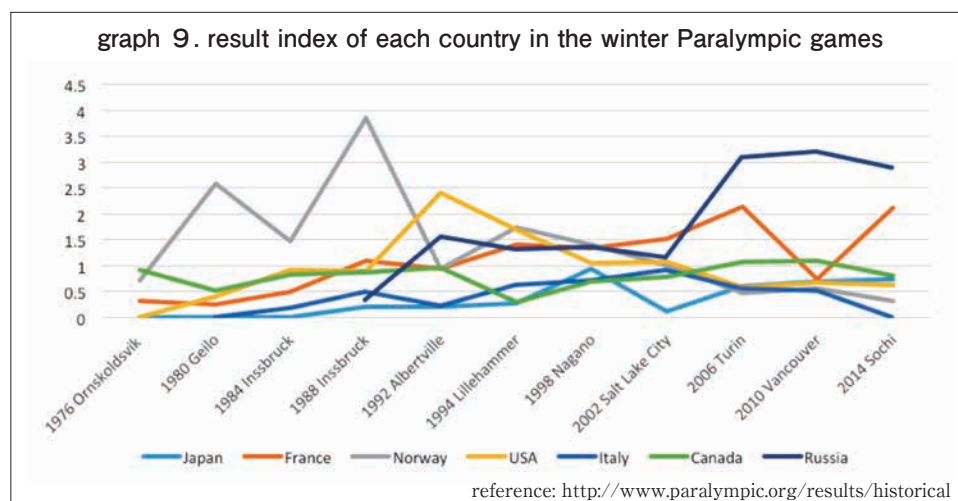
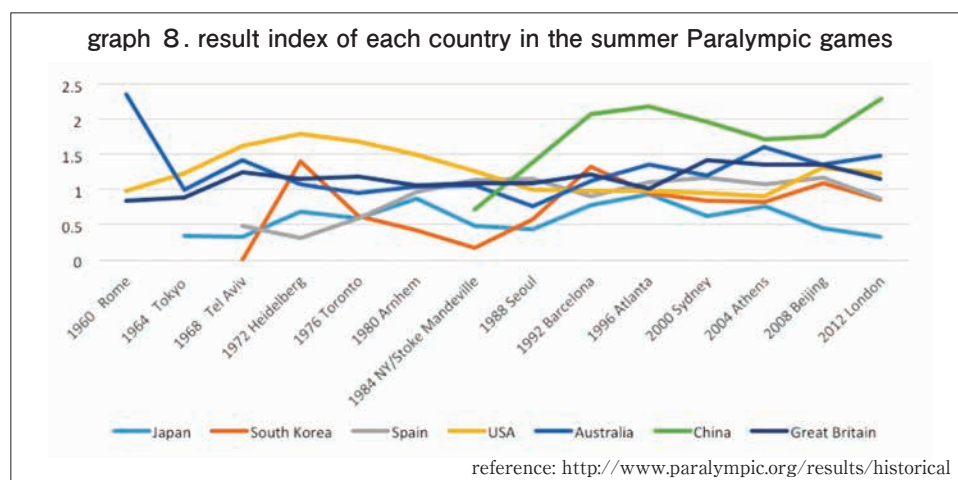
$$\text{result index} = \frac{\text{total medals of the country}}{\text{total athletes of the country}} \times \frac{\text{total athletes in each Paralympic game}}{\text{total medals in each Paralympic game}}$$

もしある国の選手団が各大会の総選手数に対する総メダル数の割合と同じ割合でメダルを獲得している場合、その大会における成績指数は1になる。この成績指数を用いれば、各大会における選手やメダルの合計数の差や、各国の各大会における選手数の増減に左右されることなく、各国の成績を比較できる。もっとも、団体競技のメダル数をチームで1個と扱うため、団体競技に出場してメダルを獲得できなかった国の指数が低くなるという条件があるが、今回はおよその成績を考えるため、個人競技のみに限らず、全競技における合計選手数と合計メダル数を元に計算した。以上の条件を踏まえて、夏季パラリンピックにおける各国（日本および開催経験国）の成績指数を比較したのが graph 8であり、冬季パラリンピックにおける各国（日本および開催経験国）の成績指

数を比較したのが graph 9である。

まず、夏季パラリンピックに関して見ると、日本の成績指数が、パラリンピックの誕生から現在に至るまで、一貫して大会平均以下の低い値にとどまっていることがわかる。例えば、中国を除く他の開催経験国（韓国、スペイン、アメリカ、オーストラリア、イギリス）の最近20年の成績指数が凡そ1～1.5の平均化やや高い程度の値なのに対し、日本の成績指数は最近20年では低下傾向にあり、近年では0.5以下の低い値にとどまっている。一方で、冬季に関して見れば、日本の最近20年の成績指数は、2002年ソルトレーク大会で0.1近くに低下しているものの、それ以外では開催経験国の間で標準的な水準を維持していることがわかる。

もう一つ、夏季と冬季に共通する現象として、比較的新しくパラリンピックに参加するようになった新興国の成績水準が高い点に注意しなければならない。例えば、中国は



夏季パラリンピックに1984年に初めて参加したが、最近20年の成績水準は低くても1.7以上、高い時には2以上という高い値を維持している。また、冬季パラリンピックに関して言えば、ロシアは1988年インスブルック大会でソ連として初参加しているが、2006年トリノ大会以降急激に成績を向上させ、3以上、又はそれに近い非常に高い値を維持している。先に挙げた各国の選手数の変化においてこれらの国の選手数の増加傾向が見られることを合わせて考えれば、パラリンピックに新しく参加した国がメダルの絶対数と相対的成績の両方で好調である一方、伝統的にパラリンピックに参加していた国々の成績が振るわなくなるという傾向が考えられる。

おわりに

以上、本論文では、「パラリンピックにおける全体、日本および各国の選手数の変化」「パラリンピックにおける全体、日本および各国の女性の参加状況の変化」「パラリンピックにおける日本および各国の成績水準の変化」に見られる特徴を明らかにしてきた。最後に、これまでの考察をもとに、パラリンピック日本代表選手団における課題をいくつか提示し、本論文を締めくくりたい。

まず、日本代表選手の数に関して言えば、新興国の参加拡大が進む中、日本代表選手の数は維持されており、また、女性選手の参加の拡大という点でも、夏季においては、日本は各国と比べて標準的な水準を確保している。この点を踏まえれば、日本代表選手の参加という課題は、ある程度達成されているといえる。また、冬季に関しては、日本代表選手の成績は低い水準から標準的な水準に近づいているといえる。

しかし、日本代表選手の参加と成績に関しては、課題も残されている。冬季大会の日本代表選手における女性選手の参加は、ただでさえ低い大会全体の水準よりさらに低い水準にとどまっている。また夏季に関しても、女性選手の参加割合は冬季よりは高いとはいえ、まだ男女平等と言い難い低い値にとどまっているという問題がある。2020年東京パラリンピックを女性にとっても身近な大会にしていくためにも、日本代表が率先してパラリンピック選手団における女性の参加拡大を目指すべきではないだろうか。また、日本代表選手の成績は、夏季に関しては一段と低い水準にとどまっている。パラリンピックに参加できる選手の育成を目指すだけでなく、メダルを獲得できる高いレベルの選手を育成するよう、戦略的な選手育成を進める必要があるのではないだろうか。

注

- 1) <http://www.paralympic.org/results/historical>

Analysis of the Number, Gender, and Performance of Athletes in the Paralympic Games

Kenji BANJO

Summary

This article investigates three topics. The first is the change in the number of athletes who have participated in the Paralympic games from Japan and from the countries which have hosted the Paralympic games. The second is the change of the percentage of female athletes in the total number of athletes and the athletes from Japan and each country in the Paralympic games. The third is the change in the standards of the total results of the athletes from Japan and other countries. To investigate these topics, this article uses the database of the results in the past Paralympic games on International Paralympic Committee (IPC) website.

First, the number of total athletes in each of the summer Paralympic game in the past indicates that the scale of the summer Paralympic games has become larger and larger to reach about a number of 4,000 athletes in the recent games, while the number of total athletes in the winter Paralympic games in the past has not increased as much as in the summer Paralympic games. In addition, the number of athletes from each country which has hosted the Paralympic games indicates that the countries which hosted the Paralympic games tend to increase the number of participants, especially in summer Paralympic games.

Second, the percentages of female athletes among the total number of athletes and the athletes from Japan and other countries in Paralympic games indicate that the participation of women in the Paralympic Games is highly limited, especially in the winter Paralympic games. And they also indicate that the participation of women among Japanese athletes in Paralympic games, in comparison to other countries which have hosted the Paralympic games, is about the average in the summer Paralympic games and below the average in the winter Paralympic games.

Third, this article investigates the standard of the total results of performance of the athletes from each country in the Paralympic games. To compare these standards, this article uses the “result index”, which is calculated according to the ratio of the number of acquired medals to the number of athletes. The comparison of the “result indexes” of Japan and other countries indicates that the standard of the results of Japanese athletes is relatively low, especially in the summer Paralympic games. And this comparison also indicates that emerging countries in the Paralympic games obtain high level of results in the Paralympic games; for example, China in the summer Paralympic games, and Russia in the winter Paralympic games.

付 録

Overview of the Summer Paralympic Games

Overview of the Winter Paralympic Games

平成26年度日本パラリンピック委員会加盟競技団体 ホームページ掲載情報一覧

パラリンピックに関する日本語文献リスト（図書）

.....

Appendix

Overview of the Summer Paralympic Games

Overview of the Winter Paralympic Games

Contents of the Website of the JPC Member Organizations in 2014
(Japanese language only)

List of Japanese Literature on Paralympics
(Japanese language only)

Overview of the Summer Paralympic Games

Year	Official Name	Location (*4)	Aegis (*5)	Mascot		Emblem of Games	Emblem of Paralympics
				Name	Image		
1960 18-25 Sep	9th Stoke Mandeville Games	Rome	ISMGC	—	—		—
1964 08-12 Nov / Domestic: 13-14 Nov (*1)	13th Stoke Mandeville Games	Tokyo	ISMGC	—	—		—
1968 05-14 Nov	17th Stoke Mandeville Games	Tel Aviv, Israel (Mexico City)	ISMGC	—	—		—
1972 02-11 Aug	21th Stoke Mandeville Games	Heidelberg, West Germany (Munich)	ISMGF	—	—		—
1976 04-12 Aug	Torontolympiad - 1976 Olympiad for the Physically Disabled	Toronto, Canada (Montreal)	ISMGF ISOD	—	—		—
1980 22Jun-01Jul	Olympics for the Disabled	Arnhem, Holland (Moscow)	ISMGF ISOD	The pair of squirrels			—
1984 NY 16Jun-30Jul / SM 22Jul-01Aug (*2)	1984 International Games for the Disabled	Stoke Mandeville	ISMGF ISOD	—	—	—	—
		New York (Los Angeles)		Dan D. Lion			
1988 16-25 Oct	1988 Summer Paralympics	Seoul	ICC	Gomdoori			
1992 04-15 Sep / 15-22 Sep	1992 Summer Paralympics	Barcelona (Madrid) (*3)	ICC	Petra			
1996 20-29 Aug	1996 Summer Paralympics	Atlanta	IPC	Blaze			
2000 22-31 Oct	2000 Summer Paralympics	Sydney	IPC	Lizzie			
2004 23Sep-04Oct	2004 Summer Paralympics	Athens	IPC	Prosteas			
2008 06-17 Sep	2008 Summer Paralympics	Beijing	IPC	Fiu Niu lele			
2012 29Aug-09Sep	2012 Summer Paralympics	London	IPC	Mandeville			
2016 07-18 Sep	2016 Summer Paralympics	Rio de Janeiro	IPC	Tom			

Source: International Paralympic Committee, Japan Paralympic Committee

*1 : 第1部が国際大会、第2部が国内大会

*2 : 切断のみストークマンデビル、その他の障がいはいはニューヨークで開催

*3 : 知的障害のみマドリード、その他の障がいはいはバルセロナで開催 (Source: David Legg and Keith Gilbert (eds), "Paralympic Legacies")

*4 : 赤字はオリンピックと異なる都市でパラリンピックが開催された年、カッコ内はオリンピック開催地

*5 : ISMGC: International Stoke Mandeville Games Committee (国際ストーク・マンデビル競技委員会), ISMGF: International Stoke Mandeville Games Federation (国際ストーク・マンデビル競技連盟), ISOD: International Sports Organisation for the Disabled (国際身体障害者スポーツ機構), ICC: International Coordinating Committee (国際調整委員会), IPC: International Paralympic Committee (国際パラリンピック委員会)

Participation		Total Athletes		Japanese Athletes		Results of Japanese athletes						Medal Events	Sports	Disability Groups (*11)
Countries	Athletes (*6)	Male (*6)	Female (*6)	Male	Female	Male	Femal	Gold	Silver	Bronze	Total			
23	400	91	44	— (*9)	— (*9)	— (*9)	— (*9)	— (*9)	— (*9)	— (*9)	— (*9)	57	8	SI
21	375 (*7: JPC378)	166	72	14	2	9	1	1	5	4	10	144	9	SI
29	750	583	199	41	7	10	1	2	2	8	12 (1 Mix)	181	10	SI
43	984	656	270	23	5	7	5	4	5	3	12	— (*10)	10	SI
40	1,657	1,012	274	31	4	12	7	10	6	3	19	— (*10)	13	SI, A, VI, LA
43 (*7: JPC42)	1,973	1,214	426	24	6	18	8	9	10	7	26	— (*10)	13	SI, A, VI, LA, CP
41 (*8: JPC total 54)	1,100 (*8: JPC total 2,102)	1,561	535	27	10	12	12	9	7	8	24	300	18	SI
45	1,800													A, VI, LA, CP
61	3,057	2,382	679	109	34	37	9	17	12	17	46	— (*10)	18	SI, A, VI, LA, CP
83	3,001	2,301	700	54	22	23	7	8	7	15	30	431	16	SI, A, VI, ID (*2)
104	3,259	2,469	790	58	23	19	15	14	10	13	37 (3 Mix)	508	19	SI, A, VI, LA, CP, ID
122	3,881	2,891	990	111	40	20	21	13	17	11	41	561	18	SI, A, VI, LA, CP, ID
135	3,808	2,643	1,165	108	54	31	21	17	15	20	52	518	19	SI, A, VI, LA, CP
146	3,951	2,568	1,383	98	64	23	4	5	14	8	27	472	20	SI, A, VI, LA, CP
164	4,237	2,736	1,501	90	45	14	2	5	5	6	16	503	20	SI, A, VI, LA, CP, ID
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SI, A, VI, LA, CP, ID

*6：男女別の合計が選手総数と合致していないのは、試合前登録数と公式報告書の間に齟齬があることに加え、団体種目における個人名の記載漏れなどがその理由と考えられる

*7：日本パラリンピック委員会（JPC）ホームページ上の数字がIPC記載数と異なる箇所は、カッコ内で表記

*8：1984年大会はイギリスとアメリカの2カ所で開催（IPCは都市別参加者数を、JPCは合計参加者数を記載）

*9：日本選手団参加なし

*10：IPC ホームページに記載なし

*11：SI: Spinal Injury（脊髄損傷）、A: Amputee（切断）、VI: Visually Impaired（視覚障害）、LA: Les Autres（その他）、CP: Cerebral Palsy（脳性まひ）、ID: Intellectual Impairment（知的障害）

Overview of the Winter Paralympic Games

Year	Official Name	Location (*1)	Aegis (*2) (*3)	Mascot		Emblem of Games	Emblem of Paralympics
				Name	Image		
1976 22-28 Feb	1st Winter Paralympics	Örnsköldsvik, Sweden (Innsbruck)	ISMGF ISOD	—	—		—
1980 02-08 Feb	2nd Winter Paralympics	Geilo, Norway (Lake Placid)	ISMGF ISOD	—	—		—
1984 15-21 Jan	3rd Winter Paralympics	Innsbruck, Austria (Sarajevo)	ICC	—	—		—
1988 17-24 Jan	4th Winter Paralympics	Innsbruck, Austria (Calgary)	ICC	—	—		
1992 25Mar-02Apr	5th Winter Paralympics	Albertville, France	ICC	no name			
1994 10-19 Mar	6th Winter Paralympics	Lillehammer, Norway	IPC	Sondre			
1998 06-15 Mar	7th Winter Paralympics	Nagano, Japan	IPC	Parabit			
2002 09-18 Mar	8th Winter Paralympics	Salt Lake City, USA	IPC	Otto			
2006 12-21 Mar	9th Winter Paralympics	Turin, Italy	IPC	Aster			
2010 12-21 Mar	10th Winter Paralympics	Vancouver, Canada	IPC	Sumi			
2014 7-16 Mar	11th Winter Paralympics	Sochi, Russia	IPC	Snowflake and Ray of Light			
2018 9-25 Feb	12th Winter Paralympics	Pyeongchang, Korea	IPC	—	—		

Source: International Paralympic Committee, Japan Paralympic Committee

*1 : 赤字はオリンピックと異なる都市でパラリンピックが開催、カッコ内はオリンピック開催地

*2 : ISMGC: International Stoke Mandeville Games Committee (国際ストーク・マンデビル競技委員会), ISMGF: International Stoke Mandeville Games Federation (国際ストーク・マンデビル競技連盟), ISOD: International Sports Organisation for the Disabled (国際身体障害者スポーツ機構), ICC: International Coordinating Committee (国際調整委員会), IPC: International Paralympic Committee (国際パラリンピック委員会)

*3 : Source: David Legg and Keith Gilbert (2011), "Paralympic Legacies," Illinois: Common Ground Publishing LLC

Participation		Total Athletes		Japanese Athletes		Results of Japanese athletes						Medal Events	Sports	Disability Groups (*9)
Countries	Athletes (*4)	Male (*4)	Female (*4)	Male	Female	Male	Female	Gold	Silver	Bronze	Total			
16	53	161	37	1 (*6)	0	— (*7)	— (*7)	— (*7)	— (*7)	— (*7)	— (*7)	— (*8)	2	VI, A
18	229 (*5: JPC299)	229	70	5	0	0	0	0	0	0	0	— (*8)	3	VI, A, SI, CP, LA
22 (*5: JPC21)	419	325	94	13	2	0	0	0	0	0	0	— (*8)	3	VI, A, SI, CP, LA
22	377	300	77	11	2	1	1	0	0	2	2	96	4	VI, A, SI, CP, LA
24	365	288	77	11	4	0	2	0	0	2	2	79	4	VI, A, SI, CP, LA
31	471	381	90	19	7	6	0	0	3	3	6	— (*8)	5	VI, A, SI, CP, LA
31	561 (*5: JPC571)	440	122	53	14	19	22	12	16	13	41	34	5	VI, A, SI, CP, LA
36	416	329	87	30	6	1	2	0	0	3	3	— (*8)	4	VI, A, SI, CP, LA
38	474	375	99	33	7	2	7	2	5	2	9	58	5	VI, A, SI, CP, LA
44	502	381	121	33	8	8	3	3	3	5	11	64	5	VI, A, SI, CP, LA
45	547	418	129	14	6	6	0	3	1	2	6	72	5	VI, A, SI, CP, LA, ID
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI, A, SI, CP, LA, ID tbc

*4：男女別の合計が選手総数と合致していないのは、試合前登録数と公式報告書の間に齟齬があることに加え、団体種目における個人名の記載漏れなどがその理由と考えられる。

*5：日本パラリンピック委員会（JPC）ホームページ上の数字がIPC記載数と異なる箇所は、カッコ内で表記

*6：個人参加

*7：日本選手団参加なし

*8：IPC ホームページに記載なし

*9：SI: Spinal Injury（脊髄損傷）、A: Amputee（切断）、VI: Visually Impaired（視覚障害）、LA: Les Autres（その他）、CP: Cerebral Palsy（脳性まひ）、ID: Intellectual Impairment（知的障害）

平成26年度パラリンピック委員会加盟競技団体 ホームページ掲載情報一覧 (2014年12月1日時点)

		HP 表示 項目	団体について																
		団体名 (※1)	法人格	団体概要	定款／会則	役員名簿	事務局人数	事務局長	事務局員	会員名簿	組織図	事業内容	ビジョンなど	連絡先の明記	収支報告	アクセスマップ	アクセス数	英語名表記	英語訳ページ
あ	アーチェリー	日本身体障害者アーチェリー連盟		×	○	×	×	－	－	×	×	×	×	○	×	×	○	○	×
	アイススレッジホッケー	日本アイススレッジホッケー協会		○	○	○	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
か	カーリング	日本チェアカーリング協会		○	○	○	1名	倉本憲男	－	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×
	カヌー	日本障害者カヌー協会		○	○	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	○	○	×
	ゴールボール	日本ゴールボール協会（女子）		○	×	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
日本ゴールボール協会（男子）			○	×	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×	
さ	サイクリング	日本ろう自転車競技協会		○	○	×	×	－	－	×	×	×	×	○	×	×	×	△ (略称のみ)	×
		一般社団法人日本パラサイクリング連盟	一社	△ (準備中)	×	×	×	－	－	×	×	×	○	○	×	×	×	○	△ (準備中)
	サッカー	日本ブラインドサッカー協会		○	○	○ (協会概要)	×	－	－	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×
		日本ろう者サッカー協会（女子）		○	○	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	○	○	×
		日本ろう者サッカー協会（男子）		○	○	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	○	○	×
		日本知的障がい者サッカー連盟		○	○	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
		日本脳性麻痺7人制サッカー協会		○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
	射撃	特定非営利活動法人日本障害者スポーツ射撃連盟	特非	○	○	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
	柔道	特定非営利活動法人日本あい視覚障害者柔道連盟	特非	○	×	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×
	乗馬	一般社団法人日本障害者乗馬協会	一社	○ (協会の沿革)	×	○	×	－	－	×	○	×	○	○	×	×	×	○	×
	水泳	日本ろう者水泳協会		○	×	×	×	－	－	×	×	×	○	○	×	×	○	○	×
		一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟	一社	○	○	○	2名	－	酒井恵子／多喜正昭	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
		一般社団法人日本知的障害者水泳連盟	一社	○	×	○	×	－	－	×	×	×	○	○	×	×	×	○	×

情報発信						競技関連						イベント等				支援			備考
H P 更新頻度	ニュースなど	F a c e b o o k	T w i t t e r	ブログ	メールマガジン	競技ルール	競技の歴史	日本代表選手	国内チーム	大会情報	戦績	スケジュール	体験会	収益事業*2	教育関連*3	ボランティア募集	寄付案内	スポンサー紹介	
月1回	○	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
月1回	○	○	○	×	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	×	○	×	○	
月1回程度	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	
月1回程度 (2014年5月11日から更新なし)	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	
月2～3回	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	
月2～3回	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	
半年に1回 (最終更新履歴は2013年4月)	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	
2ヶ月に1回 ～月1回	○	×	×	×	×	○ (準備中)	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	
月1～3回	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
月2～4回	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	
月2～3回	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	
月1～3回	○	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	○	
Facebook に 月に2～3回更新	facebook に移行	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	facebook から得られる情報 も含む
月1回	×	×	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
2ヶ月に1回 程度	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
△ (更新履歴情報なし)	○	×	×	×	×	○ (主にクラシフィケーションについて)	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	
月1～3回	○	○	×	○	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	△ (募集中)	
月に3回程度	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○ (facebookも含む)	×	×	×	×	×	○	指導者研修会あり
月1～3回	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	

		HP表示項目	団体について																
		団体名(※1)	法人格	団体概要	定款／会則	役員名簿	事務局人数	事務局長	事務局員	会員名簿	組織図	事業内容	ビジョンなど	連絡先の明記	収支報告	アクセスマップ	アクセス数	英語名表記	英語訳ページ
さ	スキー	一般社団法人日本ろう者スキー協会アルペンスノーボードチーム	一社	○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	△ (ろう者スキー協会の記載はあるが種目ごとの表示なし)	×
		一般社団法人日本ろう者スキー協会カーリングチーム	一社	○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×		×
		一般社団法人日本ろう者スキー協会クロスカントリースキーチーム	一社	○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×		×
		一般社団法人日本ろう者スキー協会スノーボードハーフパイプチーム	一社	○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×		×
		一般社団法人日本ろう者スキー協会アルペンスキーチーム	一社	○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×		×
		特定非営利活動法人日本障害者スキー連盟(アルペン知的)	特非	○	○	○	×	－	－	×	×	×	○	○	○	×	×	×	△ (準備中)
		特定非営利活動法人日本障害者スキー連盟(クロスカントリー身体)	特非	○	○	○	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	△ (準備中)
		特定非営利活動法人日本障害者スキー連盟(クロスカントリー知的)	特非	○	○	○	×	－	－	×	×	×	○	○	○	×	×	×	△ (準備中)
		特定非営利活動法人日本障害者スキー連盟(アルペン身体)	特非	○	○	○	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	△ (準備中)
		一般社団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会	一社	○	×	×	×	－	－	×	×	×	×	○	×	○	×	○	×
た	卓球	日本肢体不自由者卓球協会(HPなし)		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
		一般社団法人日本ろうあ者卓球協会	一社	○	○	○	1名 (手話・通訳)	－	井出敬子	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
		日本知的障害者卓球連盟		○	○	×	×	－	－	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×
た	ダンス	特定非営利活動法人日本車いすダンススポーツ連盟	特非	○	×	○	1名	長澤俊一	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○
		日本ろう者テニス協会		○	×	○	2名	梶野千賀子	尾形滋子	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×
	テニス	日本車いすテニス協会		○	○	○	2名	塚本直子	浦上尚子	○	×	○	○	○	×	×	×	○	×
		公益財団法人日本トライアスロン連合	公財	○	○	○	×	－	－	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○

情報発信					競技関連					イベント等				支援			備考		
H P更新頻度	ニュースなど	F a c e b o o k	T w i t t e r	ブログ	メールマガジン	競技ルール	競技の歴史	日本代表選手	国内チーム	大会情報	戦績	スケジュール	体験会	収益事業※2)	教育関連※3)	ボランティア募集		寄付案内	スポンサー紹介
1ヶ月～3カ月に4回	○	○	×	○	×	×	○	○	×	△	○	×	×	×	×	×	×	○	
1ヶ月～3カ月に2回	○	○	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	○	
1ヶ月～3カ月に3回	○	○	×	×	×	×	○	○	×	△	○	×	×	×	×	×	×	○	
1ヶ月～3カ月に5回	○	○	×	×	×	×	○	○	×	△	○	×	×	×	×	×	×	○	
1ヶ月～3カ月に1回	○	○	×	○	×	×	○	○	×	△	○	×	×	×	×	×	×	○	
2か月に1回程度	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	
月1回	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	○	×	○	×	○	○	
2か月に2回程度	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
月1回	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	
2ヶ月に1回	○	○	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
最終更新2013年	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	競技関係者向け講習会あり
月に2～3回	○	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	○	×	×	○	○	×	
－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
月1～3回	○	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
2か月に1回程度	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	
2ヶ月に1回程度	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○	○ (教室)	×	×	○	○	×	
月1回程度	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	
月1回～2回	○	○	○	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	
月1～3回	○	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	

		HP 表示	項目	団体について																
		団体名 ※1	法人格	団体概要	定款／会則	役員名簿	事務局人数	事務局長	事務局員	会員名簿	組織図	事業内容	ビジョンなど	連絡先の明記	収支報告	アクセスマップ	アクセス数	英語名表記	英語訳ページ	
は	バスケットボール		特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会（男子）	特非	○	○	○	4名	守本健児	内田裕一／真野美千代／大須賀匡	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×
			特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会（女子）	特非	○	○	○	4名	守本健児	内田裕一／真野美千代／大須賀匡	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×
	バスケットボール		日本 FID バスケットボール連盟		○	×	×	×	－	－	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×
			一般社団法人日本車椅子バスケットボール連盟（男子）	一社	○	○	○	3名	－	多智利枝／藤倉さおり／野原実佳	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
			一般社団法人日本車椅子バスケットボール連盟（女子）	一社	○	○	○	3名	－	多智利枝／藤倉さおり／野原実佳	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
	バドミントン		日本ろう者バドミントン協会		○	×	×	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
			日本障害者バドミントン協会		△ （沿革のみ）	×	×	×	－	－	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×
	バレーボール		一般社団法人日本デフバレーボール協会（男子バレーボール）	一社	○	×	×	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
			一般社団法人日本デフバレーボール協会（女子バレーボール）	一社	○	×	×	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
			一般社団法人日本デフバレーボール協会（ビーチバレーボール）	一社	○	×	×	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
			一般社団法人日本パラバレーボール協会（男子）	一社	○	×	○	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
			一般社団法人日本パラバレーボール協会（女子）	一社	○	×	○	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
	パワーリフティング		特定非営利活動法人日本ディスエイブル・パワーリフティング連盟	特非	○	○	○	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
	ビリヤード		特定非営利活動法人日本車椅子ビリヤード協会	特非	×	○	×	×	－	－	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×
	フェンシング		日本車いすフェンシング協会		○	×	○	×	－	－	×	×	×	○	○	×	×	×	○	○
	武道		日本ろう者武道連合（HP なし）		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	ボウリング		日本ろう者ボウリング連合（HP なし）		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
			全日本視覚障害者ボウリング協会		○	×	○	1名	佐藤紀子	－	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×

情報発信					競技関連					イベント等				支援			備考		
H P更新頻度	ニュースなど	F a c e b o o k	T w i t t e r	ブログ	メールマガジン	競技ルール	競技の歴史	日本代表選手	国内チーム	大会情報	戦績	スケジュール	体験会	収益事業(※2)	教育関連(※3)	ボランティア募集		寄付案内	スポンサー紹介
月2～3回	○	○	○	△	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
月2～4回	○	○	○	△	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
月に1～2回	○	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	
1ヶ月2回～3回	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	
1ヶ月2回～4回	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	
月1回	○	○	○	×	×	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	
月1回程度 (最終更新は2013年10月)	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	
月3回程度	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	
月4回程度	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	
月2回程度	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	
1か月に1回程度	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	
1か月に2回程度	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	
月に2～3回	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	
月1回程度 最終更新は2011年8月	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	○	
月1回程度	○	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	
－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
半年に1回	○	×	×	×	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	×	○	×	×	

		HP 表示 項目	団体について																
		団体名（※1）	法人格	団体概要	定款／会則	役員名簿	事務局人数	事務局長	事務局員	会員名簿	組織図	事業内容	ビジョンなど	連絡先の明記	収支報告	アクセスマップ	アクセス数	英語名表記	英語訳ページ
は	ボッチャ	日本ボッチャ協会		×	○	○	4名	河合俊次	正岡教永／永井匠／曾根裕二	×	×	×	○	×	×	×	○		×
ら	ラグビー	日本ウィルチェアラグビー連盟		○	×	×	×	－	－	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×
	陸上競技	一般社団法人日本パラ陸上競技連盟	一社	○	○	△ （工事のため一時非公開）	×	－	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
		特定非営利活動法人日本知的障害者陸上競技連盟	特非	○	×	×	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
		日本聴覚障害者陸上競技協会		○	○	×	×	－	－	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×
		特定非営利活動法人日本盲人マラソン協会	特非	△ （協会の歩み）	×	○	4名	在田宗悟	木之下仁／黒田秀隆／黒田裕子	×	×	×	×	○	×	○	×	○	×
	ローイング	特定非営利活動法人日本パラローイング協会	特非	○	×	○	1名	青木松永	－	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
ローンボウルズ	日本障害者ローンボウルズ連盟（HP なし）		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	

- (※1) 一般社団法人：一社
(※2) 特定非営利活動法人：特非
(※3) 公益財団法人：公財

情報発信					競技関連					イベント等					支援			備考	
HP更新頻度	ニュースなど	Facebook	Twitter	ブログ	メールマガジン	競技ルール	競技の歴史	日本代表選手	国内チーム	大会情報	戦績	スケジュール	体験会	収益事業*2)	教育関連*3)	ボランティア募集	寄付案内		スポンサー紹介
月1～3回	○	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	×	○	×	×	×	×	○	指導者講習会あり
月2～3回	○	○	×	×	×	△	△	○	○	○	○	△	×	×	×	○	×	○	新HP準備中
月3回以上 (大会報告がほとんど)	○	○	×	△ (写真のみ公開)	×	×	×	○	×	○	○	○	○ (アスリート発掘事業の一環として)	×	×	×	×	○	
月2～3回	○	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	○	×	
2ヶ月に1回程度	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○	×	
月1～3回	○	×	×	×	×	○ (主に伴走に関する規則)	×	○	×	○	○	○	○	×	×	○	×	×	
月1回 (大会で変動)	○	×	×	△ (準備中)	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	×	△ (サポーター募集)	×	×	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

パラリンピックに関する日本語文献リスト（図書）

（各項目につき著者五十音順。いずれも国立国会図書館所蔵。）

1. パラリンピック全般に関するもの

エックスワン 編『Paralympic magazine of Japan』エイチビー・ジャパン, 1巻1号
=Vol.1 (Sept. 2000) - 2巻5号 =v.7 (Nov. 2001).

※『フリーラン』の増刊

中村太郎 著『パラリンピックへの招待 挑戦するアスリートたち』岩波書店, 2002.

舩本直文 監修『写真で見るオリンピック大百科 別巻（パラリンピックってなに?）』ポプラ社, 2014.

2. 1998年長野大会に関するもの

依田潔 著.『人間讃歌 漢詩 長野冬季オリンピック・長野冬季パラリンピック点綴』依田潔, 1998.

倉石守 [ほか] 著『太次郎のキャンパス '98アートパラリンピック・大賞受賞 信州・戸隠村発』郷土出版社, 1999.

黒田信一 [ほか] 著『飛ぶ夢を見た。長野パラリンピックに挑む者たちの記録』光進社, 1998.

長野県作業療法士会長野パラリンピックボランティア検討委員会 編『長野パラリンピックボランティア活動報告集』長野県作業療法士会, 1999.

長野市校長会, 長野市教育センター国際化教育研究委員会 編『世界の人とともに生きる 一校一国交流活動の記録: '98長野オリンピック・パラリンピック冬季競技大会』長野市教育委員会, 信毎書籍出版センター (発売), 1999.

日本身体障害者スポーツ協会 監修『1998長野パラリンピック日本選手名鑑』中央法規出版, 1998.

八十二文化財団 編『須山計一展 第19回企画展 長野オリンピック文化・芸術祭長野パラリンピック文化プログラム』八十二文化財団, 1997.

ワールド・ゆう川中島町有線放送 編『草の根ボランティア見聞録 長野冬季オリンピック・パラリンピックを支えた人々』ほおずき書籍, 星雲社 (発売), 2001.

『長野オリンピック・パラリンピック山ノ内町記録誌』山ノ内町, 1999.

※標題紙等のタイトル: 山ノ内町の記録, 「招致編」「大会編」に分冊刊行.

『長野冬季オリンピック・パラリンピックを支えた陸上自衛隊第12師団隊員たちの記録』

北信ローカル出版センター, 1998.

『長野パラリンピック公式写真集』 長野パラリンピック冬季競技大会組織委員会, 1998.

3. 1964年東京大会に関するもの

厚生省 監修『更生の書 パラリンピック東京開催記念』日本身体障害者団体連合会,
1965.

『パラリンピック国際身体障害者スポーツ大会写真集』国際身体障害者スポーツ大会運
営委員会, 1964.

『パラリンピック東京大会報告書 国際身体障害者スポーツ競技会』国際身体障害者ス
ポーツ大会運営委員会, 1965.

4. フェスピックに関するもの

1989年フェスピック神戸大会組織委員会『1989年フェスピック神戸大会公式報告書』
1990.

第1回極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会実行委員会『フェスピック75』1975.

5. パラリンピック選手・障害者アスリートに関するもの

池田まき子 著『夢をあきらめない 全盲のランナー・高橋勇市物語』岩崎書店, 2008.

伊藤数子 著『ようこそ、障害者スポーツへ パラリンピックを目指すアスリートたち』
廣済堂出版, 2012.

大島幸夫『協走する勇者（アキレス）たち マインドは誇らしげな虹の彩り』三五館,
2013.

大日方邦子 著『壁なんて破れる パラリンピック金メダリストの挑戦』日本放送出版協
会, 2006.

京谷和幸 著『車いすバスケットで夢を駆けろ 元Jリーガー京谷和幸の挑戦』金の星社,
2011.

京谷和幸 原案；木村俊之 脚本；別府優希 ノベライズ.『パラレル '08年北京パラリン
ピック日本選手団主将・京谷和幸の物語』祥伝社, 2009.

京谷和幸, 京谷陽子 著『車椅子のJリーガー いま僕はシドニー・パラリンピックの日
本代表』主婦の友社, 角川書店（発売）, 2000.

佐々木華子 著『パラリンピックがくれた贈り物』メディアファクトリー, 2004.

佐藤真海 著『夢を跳ぶ パラリンピック・アスリートの挑戦』岩波書店, 2008.

- 佐藤真海 文『とぶ!夢に向かって ロンドンパラリンピック陸上日本代表・佐藤真海物語』学研教育出版, 学研マーケティング (発売), 2012.
- 清水一二 写真・文『パラリンピック・アスリート 輝く挑戦者たちのフォト・ストーリー』中央法規出版, 1999.
- 鳥飼新市 著『松江美季 はばたけ車いすアスリート』旺文社, 2000.
- 土方正志 文; 奥野安彦 写真『パラリンピック物語』リトル・モア, 1998.
- 土方正志 著『ケンタウロス, 走る! 車椅子レーサーたちのシドニー・パラリンピック』文藝春秋, 2001.
- 平山譲 著『パラリンピックからの贈りもの Gifts from Paralympic Games』PHP 研究所, 2012.
- 星野恭子 著『いっしょに走ろっ! 夢につながる, はじめの一步』大日本図書, 2012.
- 宮崎恵理 著『心眼で射止めた金メダル 小林深雪と日立システムスキー部の挑戦』新潮社, 2007.
- ローナン・タイナン 著; 塩野美奈 訳『終わらない挑戦 パラリンピックを制したテナー歌手ローナン・タイナン』ヤマハミュージックメディア, 2003.

6. 障害者スポーツ全般に関するもの

- 白井永男 編著『高齢者・障害者のためのバリアフリースポーツ』サンウェイ出版, 2007.
- 大滝登 写真『風にむかって にいがたの障害者スポーツ』新潟日報事業社 (製作), 2006.
- 加藤博志『視覚障害者のスポーツ 改訂版 (身障りハ・シリーズ26)』福祉図書出版, 1989.
- 芝田徳造『障害者とスポーツ スポーツの大衆化とノーマリゼーション 立命館大学退職記念論集』文理閣, 1992.
- 沢田俊子『イエローカードはぼくらの旗印』京都新聞出版センター, 2011.
- 芝田徳造『スポーツは生きる力 はばたけ! 障害者スポーツ』民衆社, 1986.
- 芝田徳造『障害者スポーツ—京都の挑戦 (かものがわブックレット17)』かものがわ出版, 1989.
- 高橋明『共に生きる: 障害者のスポーツを通して 講演録』文芸社, 2003.
- 高橋明『障害者とスポーツ』岩波書店, 2004.
- 土田和歌子『身体障がい者スポーツ完全ガイド パラリンピアンからのメッセージ』東邦出版, 2010.

日本障害者スポーツ協会 監修『みんなで楽しむ!障害者スポーツ 知って、学んで、いっしょに体験』学習研究社, 2004.

- 1 (パラリンピックで活躍する人たち 夏季編)
- 2 (パラリンピックで活躍する人たち 冬季編)
- 3 (「障害者スポーツ」ってなんだろう?)
- 4 (ユニバーサルスポーツ & あそびアイデア集)
- 5 (DVD で体感!感動!障害者スポーツ)

日本身体障害者スポーツ協会 編『創立20年史』日本身体障害者スポーツ協会, 1985.

ハンディスポーツ研究会 編『障害者と市民スポーツ』ぶどう社, 1982.

藤田紀昭『障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か』角川学芸出版, 2008.

藤田紀昭『障害者スポーツの環境と可能性』創文企画, 2013.

藤原進一郎, 田中信行 著, 日本障害者スポーツ協会 監修『障害のある人のスポーツガイド』汐文社, 2001.

- 1 (障害のある人のスポーツを知ろう)
- 2 (障害のある人のスポーツ大会を見に行こう)
- 3 (障害のある人のスポーツルールを学ぼう)

矢部京之助, 草野勝彦, 中田英雄 編著『アダプテッド・スポーツの科学 障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論』市村出版, 2004.

山中俊治『カーボン・アスリート Carbon Athlete 美しい義足に描く夢』白水社, 2012.

綿祐二 編著; 佐藤充宏 著『僕らにスポーツ・僕らもスポーツ 障害者におくる Sports for all』ベースボール・マガジン社, 1997.

渡正『障害者スポーツの臨界点 車椅子バスケットボールの日常的実践から』新評論, 2012.

Ludwig Guttman 著, 市川宣恭 監訳『身体障害者のスポーツ』医歯薬出版, 1983.

7. その他

佐々木大輔 作; 田中伸介 絵『あきらとジョニーの「めざせパラリンピック」 Akira and Johnny Aim at the Paralympics』文芸社, 2012.

パラリンピックに関する英語文献リスト

※パラリンピックに関する英語文献は、幅広い分野にまたがって膨大に存在する。網羅的な文献目録がIPC ウェブサイトにてIPC 文書館（ドイツ・ボン）所蔵目録として公開されているので、詳細な分野の文献についてはそちらを参照することを勧める¹⁾。ここでは、その中でも、パラリンピック全般に関して述べた図書を紹介する。

- Bailey, Steve (2008), *Athlete first: A history of the Paralympic Movement*, West Sussex: John Wiley & Sons Ltd.
- Brittain, Ian (2012), *From Stoke Mandeville to Stratford: a history of the Summer Paralympic Games* Champaign, Illinois: Common Ground Publishing LLC.
- Brittain, Ian (2010), *The Paralympic Games explained*, London: Routledge.
- Chiang, Silas T. C. (ed.) (2010), *FESPIC movement: sports for people with disabilities in the far east & south pacific*, Hong Kong: The Commercial Press.
- Gilbert, Keith & Otto J. Schantz (Eds.) (2008), *The Paralympic Games: empowerment or side show?*, Maidenhead: Meyer & Meyer, 2008.
- Goodmann, Susan (1986), *Spirit of Stoke Mandeville: the story of Sir Ludwig Guttmann (with a foreword by HRH The Prince of Wales)*, London: Collins.
- Howe, P. David (2008), *The cultural politics of the Paralympic movement: through an anthropological lens*, Oxon: Routledge.
- Legg, David and Keith Gilbert (2011), *Paralympic Legacies*, Illinois: Common Ground Publishing LLC
- McLarty, Stephanie (2003), *The Paralympic Movement: the transforming identity of competitive disability sport*, Hamilton [Canada].
- Papakonstantopoulos, Takis A. & Mary A. Hums (2004), *Paralympic sport: all sports for all people*, Athens: Electronic Arts, 2004.
- Scruton, Joan (1998), *Stoke Mandeville: road to the Paralympics*, Brill: St. Edmundsbury Press.
- Steadward, R. D., & Peterson, C. (1997). *Paralympics*. Edmonton, Alta: One Shot Holdings.

1) <http://www.paralympic.org/the-ipc/paralympic-archive>

日本財団パラリンピック研究会紀要 第1号

2015年1月発行

発行者 日本財団パラリンピック研究会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-3-5 赤坂アビタシオンビル4階
電話：03-5545-5991 Fax：03-5545-5992
URL: <http://para.tokyo/>

The Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group Vol. 1

Published in January 2015

Publisher Nippon Foundation Paralympic Research Group
1-3-5-4F, Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan
Tel: +81-(0)3-5545-5991 Fax: +81-(0)3-5545-5992
URL: <http://para.tokyo/english/>

ISSN 2189-1672